

コッパ

と

レル先生

峯村 明



コッパとレル先生

若いお医者 of レル先生は山を歩くのが大好き。草花や木々にさわったり、鳥や動物の様子を眺めることができるから。

ある日のこと。

山の中で先生はふしぎな、ふしぎな生き物に出会いました。それはなんと——！

ふしぎなその生き物は、学名の頭文字から『コッパ』と名付けられたのです。

登場人物

コッパ・・・・・・・・ふしぎな生き物

レル先生・・・・・・・・町のお医者さん。37歳

エマさん・・・・・・・・レル先生の診療所の看護師。63歳

カーラちゃん・・・・・・・・カーラ・アハマニエミ 診療所の患者。5歳

トーマくん・・・・・・・・トーマ・キュトラ 診療所の患者。4歳

キュトラ氏・・・・・・・・トーマの父親。システムエンジニア

ノーマン氏・・・・・・・・アルヒッパ・ノーマン お金持ちの野心家。65歳

タピオ・・・・・・・・診療所に看護師としてやってくる。ノーマン氏の甥

ペイリー・・・・・・・・レル先生の親友。40歳

イソマキ巡查・・・・・・・・警察署の巡查

ハユハ記者・・・・・・・・新聞記者

目次

[キミの名は](#)

[先生、好物をあきらめる](#)

[じつによくできたロボット](#)

[コッパは誰のもの？](#)

[ノーマン氏の野望](#)

[ペイリー、心を悩ます](#)

[そうなんそうなん、またそうなん](#)

[絶体絶命](#)

[それから](#)

[あとがき](#)

キミの名は

1.

山を見上げる小さな町にお医者さんがひとり住んでいました。レル先生とといいます。若いお医者さんで、町の人たちの病気を治していました。そして、山の動物の研究もしているのです。

ある日の朝、山の中を歩いている時のことです。シカの足跡をたどって夢中で歩いているうちに、見慣れない場所に出てしまいました。目の前は崖。高い崖で、ずっと上の方から一筋の水が流れ落ちています。空はよく晴れて青く、朝日に水しぶきがききらきらと、無数のダイヤモンドのかけらのように輝いています。そのすてきな眺めに思わず見入っていると、下の方からバチャバチャと音が聞こえてきました。

なんだろう？

ごつごつした岩場からそうっと下をのぞくと、小さな滝壺が見えました。水の中でなにか白いものがバチャバチャと水を跳ね上げてもがいているではありませんか。

シカでもなければイノシシでもなく、リスやウサギでもありません。その白い何かは翼を持っているようなのです。それも、鳥というよりはコウモリのような羽です。

「さてさて。あれはいったいなんだろう？ どれ、見に行ってみよう」

レル先生はひとり言をつぶやきながら、そろそろと岩場を下りて行きます。すると……「たすけてー」子どもの声です。岩場で足をかける場所をさぐっていたレル先生は、はた、と動きを止めました。きょろきょろとあたりを見回しますが子どもがいるようではありません。「空耳かな」すると、またもや、「たすけてー！！」と。その声は下の方から聞こえてきました。

白いコウモリのような翼を持った生き物が、くちばしをぱくぱくさせながら、叫んでいたのです。

2.

「たすけてー！ たすけてー！！ 誰かー！！」

「これは驚いた」

不器用にバチャバチャと水を跳ね上げている生き物を、レル先生はしげしげと眺めます。

「キミは誰だい？ そんなところで何をやっているの？ どうして人間の言葉がしゃべれるの？」

「そんないっぺんに聞かれたって、答えられません！ 質問はひとつずつにしてください！」

「ああ、ごめんごめん。ほら、よいしょ、っと」

レル先生は、細長いくちばしを両手でつかんで水から引き揚げてやりました。なぜくちばしかというと、翼はうっかりつかんだら破れてしまいそうなくらい、薄かったからです。

白い生き物は乾いた岩場に首を投げだして横たわり、ぜえぜえと激しく喘いでいます。レル先生はびしょ濡れの服のすそを手で絞りながら、その様子を興味深げに眺めています。どうしても目が離せないのです。なにしろ、こんなふしぎな生き物を見るのは生まれて初めてだったのですから。

尋ねたいことがいくつも思い浮かびましたが、とにかく、最初に聞くとすればこれだ

ろう、という質問は、「キミ。大丈夫かい？」でした。

白い生き物は時間をかけて呼吸を整え、ようやく岩場に起き上がりました。そして、首をかしげてレル先生を見上げました。その体は大きいのか、小さいのか。細く長くちばしのついた頭部と長い首が目を引くのですが、体は小さく、頭、首、体がそれぞれ同じくらいの割合の長さ、首の付け根から下に向かって伸びた翼を、人間でいえば手のひらにあたる部分で地面について上体を支え、翼の先端は体の後ろへ向かって折れ曲がっています。とても、この世のものとは思えない、奇妙な生き物。とくに、肩から手のひらまでの骨格がいかにも変っていて、機会があったら解剖して詳しく調べたいと、レル先生はこっそりと目を光らせました。

「おかげさまで」、と生き物は言いました。あの子ども声で。この変わった生き物はまだ子どもなのです。

「あやうく、溺れて死ぬところでした。助けてくれて、どうもありがとう」ぺこりと頭をさげたら、くちばしの先が岩にごつんとぶつかりました。

「いたい～」 「やれやれ、大丈夫かい??」 「ひ～～」

3.

生き物が泣いて痛がるので、レル先生は、よしよし、とくちばしをさすってやりました。それにしても、この長くちばしでどうやって人間の言葉をしゃべることができるんだろうと首をひねる先生です。そういえば、さっき、水から引き揚げたとき、おどろくほどその体は軽かったことを思い出しました。鳥のようで鳥でなく……。いったい何物なのか、好奇心は大きくなるばかりですけれど、だいじなことを聞かなければならな

いと先生は思いました。

「キミはまだ子どもだろう？ お父さんやお母さんは？」

生き物はきょとんとして首をかしげました。

「じゃあ、おうちはどこ？」

「……？」

「滝壺で溺れていたということは、この崖のずっと上の方から水に流されてきたんじゃないかな？ ちがうかい？」

「……？」

「えーとー、キミは——何を食べる？」

生き物の頭の周りに浮かんでいたいくつものはてなマークがぱっと消え、頭の両側の涙のような形の目がぱっと輝きました。

「そうだ！ 僕はあれを食べたかったんだ！」

いきおいよく体を起こした生き物は、ぱっと飛び立ち、滝壺から流れ出ている川に向かってくちばしから突っ込んでいきます。その動きがあんまり急だったので、レル先生は、ただ、呆然と眺めていました。それは小さな流れではありましたが、けっこう深く、速かったのです。くちばしから突っ込んでいった生き物をすううっと吸い込むように飲み込んでしまいました。しばらくすると——

「たすけてー！！」十メートルくらい先のほうで、バチャバチャと水しぶきがあがりました。白いものがもがきながら流されていきます。

「なにをやっているんだ？」レル先生はあきれながら、膝くらいまである冷たい溪流に踏み込むのでした。

「大丈夫かい？」

「……大丈夫です」

「大丈夫じゃないだろ。顔色がよくないぞ」

薄い膜のような翼が裂けてしまっています。流れに飛び込んだときに川床のごつごつした岩に当たったからでしょう。

「うちへ帰れば治してあげられるよ。ボクは医者だからね」レル先生も全身ずぶぬれです。ガタガタと震えながら言いました。「これはたまらない。さあ帰ろう」

「……おなかがすいた」

「あとで点滴してやる。とにかく帰ろう。凍え死にしそうだ」

レル先生は来た道に戻りました。懐に入れてやった生き物はしばらくするととうとうとはじめ、やがてくーくーと寝息をたて、眠ってしまいました。

5.

「うーーーむうーーー」

レル先生は腕組みをしてむずかしい顔でうなっています。デスクの上に分厚い本を積み上げ、その向こうの壁に一枚の写真。レントゲン写真です。裂けた翼をどうやって治したものかと、レントゲンを撮ったのです。そして、生真面目で研究熱心な先生は、この生き物はいったい何だろうとあれこれ調べてみたのです。

「——これは」

「やあ。気分はどう？」

「あぐあぐあぐ」

くちばしのはじっこから点滴のチューブを入れられ、しゃべりにくいのです。なので、生き物は大丈夫な方の翼をちょっと持ち上げてみせました。

「まあ、良さそうだね。よかったよかった。ところで、キミのことをちょっとばかり調べさせてもらったよ。キミ……」

「あぐ？」

「自分のことを、知ってる？」

「……あぐ？」持ち上げられた翼が左右に振られます。知りません、というところでしょう。

「だろうねえ、ボクだってふだん、自分は人間だ、なんてあんまり考えないもの。キミはね、鳥でもなければコウモリでもない。恐竜の一種だ」

「おーぐう？」

「そう。翼ある恐竜。ケツアルコアトルス・ノルトロピだ」

6.

「うげげげあげうぐ？」

「そう。ケツアルコアトルス。このくちばし、翼、頭と首と胴体部のプロポーション。

間違いない。化石から復元された想像図とそっくりだ」

「がげぎ？」

「何千万年も前の地層から発見された古い骨さ。三メートルにもなる頭部、胴体はその四分の一、翼を広げると端から端まで十メートルもあったという。ふしぎな作りの体だけれども、とてもうまく空を飛べた。昔昔の大昔、キミの仲間はおおぜい、空を飛びまわっていたらしい。でもある時とつぜん……」

「げええ」気持ちがわるいとか、不満があるとかではありません。へええ、と感心しているのです。

「まあ、だから、ね、キミも元気になれば空を飛んでうちへ帰れるというわけ」

レル先生は、しゃべりながら生き物が横たわっている寝台をぐるりと回り、ケガをした方の翼を調べにいきました。そして目を見張りました。昨日は山の中の道を迷い迷い、ようやく家へ戻った時はもうすでに日が暮れていました。さすがに疲れていましたが生き物に栄養を補給し、寝かせてやりました。つまりケガをしてから一晩経っているのですが……ぱっくりと裂けていたところに薄く膜が張っているのです。

「こいつはすごい！ たいした自然治癒力じゃないか！」

「うげ……？」

「キミの体が自分で治ろうとしているんだ。医者など必要としないのさ」それから、ぼんぼんと首筋を軽く叩いてやり、「もう少し眠りなさい。ボクも昨夜は調べものをしてたもんだから、一睡もしてないんだ。ちょっと寝てくるよ」

7.

「きゃあああああ！！」

けたたましい女の人の悲鳴で先生は跳び起きました。「しまった！ 寝過ごした！」

今のは、エマさんの声。レル先生のお手伝いに来ている看護師さんです。診察室で寝ていたケツアルコアトルスを見つけてしまったのです。シャツを羽織りながら駆けつけてきた先生に向かって、「せせせせせんせい！！ なななな何かいますわほらあそこ……！！」

診察室をのぞいてみると、寝台に誰もいません。よくよく見まわしてみると、白いものが部屋の片隅で小さくなって震えていました。エマさんもケツアルコアトルスもいきなり顔を合わせてしまい、びっくり仰天したのでしょうか。

「おはよう、エマさん。彼は患者だよ」先生は診察室をゆっくり横切って、ケツアルコアトルスに近づきしゃがみこんで話しかけました。「さ、ボクが来たよ。安心して」

「……彼？ ……患者？」エマさんは初めて床に点滴のスタンドが倒れているのに気がつきました。そして、ふっくらした胸に手をあて、「あらまあ！」と声をあげました。

「あらあら！ まあまあ！ 患者さんだったのね！ おどろかしてごめんなさいね！ さあ、こちらへおいでなさい！」

ふっくらした手が差し出されました。ケツアルコアトルスは先生の体越しにおそろおそろその手を見ましたが、そろそろと先生の影に隠れてしまいました。

「さ。怖くないのよ」

「ははは。どうも彼は人見知りするようだね」

「先生、その子は男の子なの？」

「そうだよ。自分で『僕』っていつてるから」

「ふうん……自分でねえ……お利口なのねえ」

翼のケガはみるみる治ってしまい、ケツァルコアトルスは三日と経たないうちにすっかり元気になりました。レル先生は、もうしばらく様子を見て、彼を見つけた山の奥へ帰してあげると約束しました。

「キミはまだ上手に飛べないし、エサも獲れないだろ。飛ぶ練習とサカナを捕まえる練習をしなくちゃね」山へ帰るのはそれからだね、と先生は言いました。

「ところで、キミを何と呼ぼうか。ケツァルコアトルスだから……ケツ、はどう？」

レル先生に懐いてしまったケツァルコアトルスは、なんと呼ばれようとかまわないと思いましたが、それにしても、ケツと呼ばれるとなんだかお尻のあたりがむずむずします。翼でむずむずするあたりをさすりながら、「わるかないけどー」と口をとがらせました。「もうちょっとかわいいのがいいな。Quetzalcoatlusだから……」、と先生の口真似です。「Qちゃんてどうかな？」

先生はむずかしい顔で首をかしげます。ぴんどこないようです。

「Q……そうだコッパはどうだろう!？」

「……コッパ？」

「外国の古〜〜い言葉で、Qをコッパと読むんだよ。どうだい？ コッパ」

「それはいい！ すてきだよ！ なんてかわいいんだろう！」

彼らのやり取りをエマさんは微笑ましく見守っているのです。こうしてケツァルコアトルスは、コッパと呼ばれるようになったのです。

先生、好物をあきらめる



9.

診療所の三階にある先生の屋根裏部屋の天窓が少し開いています。何日か雨が続いた

あとの気持ちよく晴れた朝だったので、空気を入れ替えようと先生が開けたのです。コッパはきれいな空を見上げて、あそこを飛べたらどんな気持ちだろうと夢想到にふけていました。すると——天窓の窓枠にばさりと降り立った者がいます。真黒な羽、真黒な目、ぎらりと光る黒いくちばし。なにからなにまで黒い。カラスです。

カラスは横目で屋根裏部屋の中をのぞき込みます。空を見上げていたコッパと目が合くと、じろじろと見返してきました。

「おかしなやつがいるな。ニワトリか？ いやいや、羽が一本もない。ツルか？ いやいや、足がてんで短い。ああなんて不格好だ」勝手なことを言っています。コッパはニワトリもツルも知りませんでしたが、なにやらほかの生き物と比べられているのわかりましたし、カラスの目つきが不愉快でした。そして、窓枠にとまったままカラスがしきりにかあ、かあ、かあ、かあとひとりごとを言っているのです。だんだんいらいらしてきました。上から見おろされているのでこれでは昼寝もできません。カラスの目に入らない場所へ動いてしまえばすむのですが、ここはレル先生の家でレル先生の部屋でレル先生のイスの上なのです。コッパのお気に入りの場所なのです。いこいのひとときをカラスに邪魔される覚えはありません。

カラスがもう一羽、やってきました。仲間を呼んだのです。二羽のカラスがかあかあ、かあ、かあ、と騒々しく会話を始めたので、我慢ならなくなったコッパはついに叫びました。

「う・る・さーい！！」

とたんに。

びしびしっ——。

天窓にひびが入ったのです。カラスたちもなにか強い力に襲われた気がして、ばさばさと慌てて逃げて行ってしまいました。

10.

「天窓の網入複層強化ガラスにひびが入るなんて——！」レル先生は呆然としています。かんとんに割れたりするものではないらしいのです。「なんでだろう、キミ、心当たりはない？」

先生に話をふられて、コッパはそろそろとうなずきました。そして、窓の上のガラスがうるさかったから、「うるさい」とひとこと叫んだのだと正直に白状しました。先生はまじまじとコッパを見つめました。怒られるんじゃないかとコッパは小さくちぢこまっています。

やがて先生は肩をすくめて言いました。「キミがケガしなくてなによりだよ。あの窓が割れて落ちてきたらそれこそおごとだからね」

それから、いったいいくらかかるんだろうと心配しながら修理を頼む電話をかけました。

コッパの正直な告白を先生はまともに受け取らなかったのです。

11.

人見知りをするコッパは、診療所を訪れる人たちを最初、ものかげからこわごわのぞいていましたが、ある時、小さな坊やに見つかってしまいました。その子は熱を出していて、待合室のベンチで辛そうにお母さんに寄りかかって、もうろうとしていましたが、ドアの向こうのコッパと目が合ってしまったのです。

「おかあさん」と、坊やお母さんの服をつかみ、ドアを指差します。「あそこに、なにかいるよ」

「レル先生かエマさんでしょ」

「そうじゃないよ、白くて小さいよ」

「白くて小さい？ あらま。子猫か子犬かしら」お母さんは相づちを打っていますが、週刊誌の記事に心を奪われています。

「そうじゃないよ、なんだか鳥みたいだよ、ねえ、ほらあそこ」服を強く引っ張られてお母さんはようやく週刊誌から心を奪い返します。「どこに、なにがいるんですって？」

坊やが指差しているのは床に近いあたり。そこに白いサンダル履きの足が現れたのでお母さんは目をぱちくり。「トーマくん、あなたの番ですよ。さあ、先生に診てもらいましょう」

お母さんは週刊誌を閉じながらため息をつきました。「トーマあなた、エマさんの足を白鳥かなにかと見間違えたのね」

「ちがうってば！ほんとに白くて小さいのがこっちを見てたんだよ！鳥みたいだったよ！」

「まあ。それはきつとおばけね」

白くて小さいおばけみたいなものは、エマさんの背後をそそくさと逃げていきました。

やがて、町の人たちは、レル先生の診療所に『ふしぎなもの』がいる、と、噂しあうようになりました。

エマさんが病気になってしまいました。重いぎっくり腰で、仕事ができなくなってしまったのです。

「さあこまった」

レル先生は頭を抱えます。「エマさんの代わりに仕事を手伝ってくれる人を探さなくちゃならない」でも、そんな人が易々と見つかるとは思えません。エマさんはレル先生を子どもの頃から知っていて、その上、とても優秀な看護師さん。そんな人の代わりが務まる人が、はたしているのでしょうか。

コッパは、先生の周りをさんざんうろうろしたあげく、立ち止まり、くちばしを上に向け、ぱっと飛び立って先生のデスクの上に降り立ちました。その目は決意に輝いていました。そして言いました。

「先生。僕がやる」

先生はぼんやりと顔をあげます。「……うん？ 何をやるんだい？」

「決まってるじゃないか。エマさんの代わりだよ」

コッパと先生は真正面から顔を突き合わせ、にらみ合うように互いの目をのぞきこみました。

13.

先生の頭の中をさまざま考えが駆け巡ります。エマさんの代わり。エマさんの、あ
る一日を振り返ってみましょう。

八時半に診療所に出勤。お掃除をし、レル先生の診察に必要なもの……薬のたぐいや、注射器や注射針などなど……がちゃんとそろっているか確かめます。九時、午前の診療が始まると、やって来た患者さんに具合を聞いたり、先生の診察の助手をします。

九時半、電話がかかってきました。『五歳の子が昨日の晩からおなかが痛いと言っています。どうしましょう？』

『カーラちゃんね、今すいてるから連れてきてくださいな』

しばらくしてやってきたカーラちゃんは青い顔をしていました。『おなかが痛いの。気持ちがわるいの』と泣き泣き訴えます。

『血液検査をしますね。カーラちゃん、ちょっとちつくんするけど、我慢できる？』

エマさんの問いかけにカーラちゃんは涙にぬれた目でけなげにうなずきます。採血し検査するのはエマさんの仕事なのです。そしてその結果をみて、『虫垂炎ですね』とレル先生は言いました。

『虫垂炎！？ 盲腸ですよ先生！？ あたし小学生の頃手術しました。すると、カーラも手術を！？ まだ五歳なのに！？』

『いえいえお母さん、落ち着いてください、軽い炎症ですよ、薬で治ります。手術の必要はありません。抗生剤を点滴します。エマさん、準備を』

カーラちゃんは点滴をしながら安心したのか、ぐっすり眠ってしまいました。その間にも患者さんはひとりふたりとやってきます。この日はカーラちゃんのほかはお年寄りばかりで、先生はひとりひとりと話をし、午前の診察が終わったのは午後一時を回った頃でした。それからエマさんと先生はかわるがわる遅いお昼の食事をとり、点滴中のカーラちゃんの様子を見に行き、午後の診察の準備をします。ひと休みする間もありません。そして夕方近くになると学校帰りの学生や仕事を抜け出してきたという大人などが訪れます。多くは風邪の症状でした。ぐっすり眠っていたカーラちゃんが目を覚まし、迎えにきた母親と家に帰って行ったのは四時すぎ。その頃にはかなり顔色が良くなっていて、エマさんはほっとしたのでした。

『本日の診療は終了しました』の札を玄関に下げたのは六時半。一日のあと片付けをしながらエマさんは先生に尋ねます。『先生、晩ごはんは召し上がりたいものは、ございますかしら？』

『そうだなあ、よし、たまにはボクが作ろう。冷蔵庫になにかあるだろう。エマさんも今日はたいへんだったものね』

『まあ！ とんでもありませんわ！ たいへんなのは先生じゃありませんか！』『いやいや、エマさんだよ』

『いえいえ……まあ……それはともかくですね、わたくし、お買い物に行きますから、いるものがあつたらおっしやってくださいな。そろそろトイレトペーパーがなくなるんじゃないかもしれませんこと？』

『じゃあ、頼もうかな、それと、ついでに食器を洗う洗剤も』

14.

エマさんは働き者だ、レル先生は常々そう思っていたのですけれども、こう改めて振り返ってみますと、日常生活から仕事までこんなにエマさんを必要としていたのかと、おどろくやらあきれるやら。仕事が仕事だけに、どうしても手伝いの手は必要なのですが、（それにしても）と先生は思うのです。コッパ本人からの申し出とはいえ、彼にいったいなにができるのでしょうか。

疑わしげな先生の目に向かって、コッパは憤然と言いました。「なんだってできるよ！！」

じつを言うと、ふだんエマさんのやっていることを眺めていただけで、なにもやってみたことはないのです。しかし（ケツァルコアトルスにはケツァルコアトルスの意地がある！）のでした。大好きなレル先生に疑わしい目を向けられて、コッパはそう思ったのです。

コッパの剣幕に先生はたじろぎました。「そ、そうかい?? キ、キミがそういうなら……」

どのみち、本職の看護師さんを探さなくてはなりません。が、こんな田舎町の小さな診療所に来てくれる人はかんたんには見つからないでしょう。それにぎっくり腰で都会の病院に入院してしまったエマさんのことも心配です。とにもかくにも、レル先生としてはネコの手も借りたいのでした。

15.

「ひとまず」、キミは診療所に来る人と顔を合わせないようにと、レル先生はコッパに言い含めました。みんな、びっくりするに決まっていますから。コッパも素直に「はい」とうなずきました。「ぼちぼちやりますよ。先生」

とはいうものの。こうもりのような鳥のような『ふしぎなもの』が、くちばしにほうきをくわえて診療所の玄関を掃除している姿が、人の目にとまらないわけがありません。レル先生の診療所に『小さな白いふしぎなもの』がいるといううわさは、本当だったのです。

「ぼくが言ったとおりじゃないか」トーマ坊やは勝ち誇ります。

「あたしもふしぎなことがあった」と、カーラちゃん。「もうちょうでてんてきしてらってるときにね、かなしくて泣いてたの。そしたら誰かがそばに来て歌をうたってくれた。とてもきれいな声で、あたし、妖精さんが歌ってるんだって思った。それで気持ちが悪くなって、いつの間にか眠っちゃったの」

コッパはほうきを置いて、ごあいさつします。「みなさん。おはようございます」

「あら。気のせいかしら。これ、今しゃべった？」

「たしかにしゃべったわ。まあ。よくできてること」

「そうよねえ、作り物よねえ。なんだか不気味ねえ」

診療所の先に公園があつて、親子が連れ立って通っていきます。小さな子はコッパに興味津々ですが、大人はそうでもありません。おでこにしわを寄せ、なんだか不気味だと言っているのは、トーマ坊やのお母さんで、「そう？ なかなかかわいいじゃないの」と膝を折ってコッパに見入っているのはカーラちゃんのお母さん。カーラちゃんがその隣にしゃがみこんでいました。「おはよう。お話ができるのね。あたしはカーラ。あなたのおなまえは？」

「コッパといいます」すかさず答えが返ってきたので、居合わせた人たちはちょっとびっくりしました。

「すてきな名前ね！」

「ありがとう、カーラ」

「うわ。あたしの名前、覚えてくれたのね」

「もちろん」

玄関先でなにやら話し込んでいる様子に、レル先生は気が気ではありません。が、小さな子たちの笑い声がします。心配するほどのことではないのかな、でも心配だ、と奥の方で気をもんでいると、玄関を閉めたコッパがとことことやってきました。

「お掃除終了。次は先生の朝ごはん〜♪」鼻歌が混じっています。

「おや、機嫌がいいねえ」

「はい。いっぱい、褒められました。よくできたロボットだって」

とっさに、レル先生なんと言っていていいかわからず、あいまいな表情を顔に浮かべました。レル先生がめったに見せない表情だったのですが、機嫌のいいコッパは気にしませんでした。

16.

そして、大事な朝ごはんです。先生は毎朝欠かさず朝ごはんを食べていますから。

コッパが張り切っているので、先生は自分で淹れたコーヒーを片手に、コッパの朝ごはんづくりを眺めることにしました。

フライパンをコンロにのせ、冷蔵庫からベーコンと卵を持ってきて、熱くなったフライパンにまずそうっとベーコンを入れ、ベーコンがじゅうじゅうと焦げておいしそうな匂いがしてきたら、今度は卵を――

そういった作業をコッパはぜんぶくちばしの先を使ってやっていました。とても器用に、上手にできるので、レル先生はぼかんと口を開けて眺めていました。コッパは焼けたベーコンのとなりに目玉焼きをつくるタイミングをねらって、くちばしに卵をくわえていました。

ベーコンが焦げてきたのでレル先生はつい、「そろそろ卵を――」と口を出しました。コッパは、卵をくわえたまま、ゆっくりと先生を振り向きます。

(おっと。よけいなことを言っちゃったかな) 先生は、しまった、と思いながらコッパをみると――コッパは目にいっぱい、涙をためているではありませんか。

「ど、どうしたんだいったい？ コッパ？」涙の理由がわかりません。「えーと、ボクがよけいな口出しをしたのがいけなかったのかな？ それが悲しいのかい？」

この純真な生き物の涙にレル先生はあわてました。持っていたコーヒーのカップをいそいでそのへんに置き、両手をコッパに差し出しました。その手のひらにぼとりと卵が

落ちました。

17.

「どうしちゃったんだろう」コッパはつぶやくように言います。声が震えていました。「いきなり、とても、とても、悲しくなって……胸が苦しくなって……どうしちゃったんだろう。僕は先生に朝ごはんを作ってあげただけなのに。どうしてこんなに悲しいの??」

先生はコッパのひとことひとことを、うなずきながら真剣にきいていました。機嫌よく朝ごはんを作っていたコッパがとつぜん悲しくなってしまったわけが先生にもさっぱりわかりません。聴けば、それはコッパ本人にもわからないというのです。

ふたりは互いに顔を突き合わせ、途方にくれました。ふと、先生は手の中の卵が気になりました。コッパから受け取った卵です。先生の目は、卵とコッパをかわるがわる見ました。そして、先生の頭の中にはだんだんとはっきりした絵がうかんできました。割れた卵のカラを頭にのつけた小さな、ケツアルコアトルスのヒナ——

鳥のようで鳥でない。鳥でないけれど鳥のような姿のコッパはきっと、おそらく、卵から生まれたに違いありません。鳥が卵をどう思うか、鳥にたずねてみなければわかりませんが、純真で感受性の強いコッパは卵を自分自身のように感じたのではないかなと、先生は思いました。

(だから卵を割るとか食べるということに、強い抵抗を覚えた。そういうことかもしれない——)

きっとそうだ。先生は何度も小さくうなずいて言いました。

「コッパ。キミは卵が好きなんだね」

いきなりそう言われてコッパはきょとんと首をかしげます。

「ああ、ごめんごめん。言い方を変えよう。キミは卵を愛してるんだ」

コッパはますます首を傾けながら考え考え言いました。

「そうだねえ……僕は卵が好きだよ。けれど、食べたいっていうのとは違うかなあ」

サニーサイドアップ、ボイルドエッグ、スクランブルエッグ、オムレツ、茶わん蒸し。

先生の頭の中をさまざまな卵料理がかけめぐりました。栄養満点なうえに、大好物ばかりでしたが、あきらめることにしました。

じつによくできたロボット

18.

その日、お客がありました。つやつやとピンク色の頬をし、白髪の、大柄な男の人。名前をノーマンさんといいます。

「ごぶさたしております。レル先生」その人は大きな声で嬉しそうにいいました。レル先生もにこにこたえます。「これはこれは。お元気になられたのですね。なによりです」「いやいや。先生のおかげですよ。あの時は、もう、私の人生ももはやこれまでかと思いましたからなあ」

何年か前、山登りの最中に足を踏みはずして岩場を転げおち、大けがをしたノーマンさんがレル先生のところへ運ばれてきたのでした。大きな町の大きな病院へ行くまでの応急処置をレル先生がしたのです。

「あの時のけがはすっかりよくなりました。しかし、ひと月の入院はちとこたえましたわ。大事な商談がふいになってしまいました。さすがにこりて、大好きだった山登りをやめました。そしたら、こんなに太ってしまってねえ」ノーマンさんは大きな声で笑いしました。部屋の空気がびりびりとふるえるくらい大きな声に、お茶を運んできたコップはちょっとびっくりしました。カップとソーサーを載せたおぼんを長いくちばしの先でくわえたコップをノーマンさんは笑ったまま目で追っていました。それから「よくできてますなあ」と言っただけでした。

「ところで先生、今日伺ったのはほかでもありません、人手を探しておいでとか」

19.

エマさんがぎっくり腰で仕事ができないことをノーマンさんは聞きつけてきたのです。

「アイノア病院で私の甥っ子が看護師やってましてな」

それは、エマさんが入院中の病院で、かつてノーマンさんが山でけがをして入院した病院でもあります。

「レル先生にはいつか恩返しをせねばと思いつけておりました」、と、ノーマンさんは

遠い目で窓の外をみました。「甥っ子に先生の手伝いをさせましょう」

「え」

思いがけない話に、レル先生はあぜんとしてしまいました。

「甥御さんというのは、その、アイノア病院で看護師をされてるという——？」

「そうですよ。ばりばりの現役ですよ」

「いや、その、都会の大病院でばりばりの現役で働いているんでしょう？ そちらの仕事はどうされるんです？」

「そっちは辞めさせます」

「は？」

「レル先生はなんにも心配いりません。私にお任せください。甥っ子は——名前はタピオといいます——明日からこちらへ来させます」

「ええ？ 大病院の方でも優秀な看護師にとつぜん辞められては、その、困るのでは??」

「心配はご無用」

「し、しかしですね」

「だーいじょうぶです。だって……」ノーマンさんはカップからお茶を一口飲んで続けました。「アイノア病院のオーナー（持ち主）は、私なんですから」

20.

あれよあれよという間にノーマンさんが帰っていき、ひとりになったレル先生は途方にくれました。こんなに早く優秀な看護師さんがみつかるとは思っていませんでしたから、びっくりするやらありがたいやら、なのですが……

（すなおに喜べない……）

(きっぱりと、ていちょうに、断るべきだったかもしれない……)

(しかし、ノーマンさんがよかれと思って手をうってくれたことでもあるし……)

心が千々に、もやもやと乱れます。知らず知らずに、両手で頭を抱え込んでしまいます。と、その時――

誰かが、歌っています。高く、澄んだ声で。

(少年が荒野でバラをみつけた……♪)

レル先生が子どもの頃、おじいさんからもらった古いレコードのなかにあった曲で、先生のお気に入りのひとつでした。時々聴いているうちに、いっしょに聴いていたコッパが覚えてしまったのです。

(ボクは岩山でケツァルコアトルスをみつけた……)

先生は目を閉じてほほ笑み、コッパの歌に耳を傾けるのでした。

21.

レル先生の診療所に新しい看護師さんがやってきました。

「優秀な成績で学校を卒業したので、それはぜひとも我が病院で働いてもらわなくてはなりませんからな、なにしろ、我が病院のスタッフは一流ぞろいですからな、一流以外は要りませんからな」

ノーマンさんはソファの上で胸を張り、大きな声でそう言うのでした。「タピオはきっと、先生のお役に立てるにちがいありません」

タピオは小柄な青年でした。レル先生は一目みて、と、胸をつかれました。ノーマンさんのような豪快なところがひとつもないのです。おじさんと甥の関係なので、そうそう似ているわけではないとはいうものの、むしろ、ノーマンさんとは正反対だという印象を受けたのです。そばかすのある小さな顔に、優しげというよりは気弱げな青い目がしきりにまばたきをしています。

「どうも」とタピオは自己紹介を始めました。

「えー、私はその、地域に密着した医療施設におきまして、地域医療に貢献したい、地域住民の方々とふれあいながら役に立てる仕事がしたい、と夢見てきました……」

つかえつかえ、それだけのことを言い終えたときには、タピオはびしょりと汗をかいていました。レル先生はそんなタピオにじっと目をあて、ちょっと微笑し、「どうぞよろしく」とだけ、言いました。「さっそくだけど、すぐに仕事をしてほしいんだ。患者さんが来る前にひととおり説明するから、荷物はそっちの部屋に置いて、こっちの部屋へ来て」

コッパは、ポストンバッグを置きにきたタピオと顔を見合わせましたが、タピオはすぐに部屋を出ていってしまいました。彼はとてもとても緊張していて、なにも目にはいらなかったのです。

風邪気味だというおばあちゃんに付きそってやってきたカーラちゃんは、診察がおわるのを待っています。静かな音楽が流れる待合室には誰もいなくて、カーラちゃんはひとりきり。絵本をひととおりながめて、ふと顔をあげると……

受付のカウンターでコッパが頬杖をついています。小さなケツアルコアトルスが診療所の受付で頬杖をついているというのはふしぎな光景ですけれども、カーラちゃんはふしぎとは思いません。というより、コッパに会いたくておばあちゃんについて来たのでした。

ぱたんと絵本を閉じてわきに押しやり、カーラちゃんは椅子をすべりおります。そして受付に歩いて行ってカウンターを見上げ、「ねえコッパ」と話しかけます。「あたし、コッパの歌が聞きたいな」

ぼんやりしていたコッパは、はたと我にかえりました。「歌？ ああ。ごめんね、今は歌えないよ」

「どうして？」

「だって、仕事中だもん」頬杖をついたままコッパは答えます。

カーラちゃんはコッパに負けるもんかとばかりに口をとがらせ、「つまんなーい。しごと中だからあそべないなんて、あたしのパパみたいなこと言って」カーラちゃんのお父さんは町でレストランをやっているのです。

「うーん。ごめんね」

「コッパ……なんか、元気ないね」

「そんなことないよ」

「おしごとがつらいの？ あ……わかった！ タピオさんがいじわるするんだ！」

「誰が誰にいじわるするんだって？」

後ろから声が聞こえてコッパは、はっと振り返りました。レル先生でした。「な、なんでもありません。みんな仲良しです」

先生はちょっと眉をあげてほほ笑みました。「アハマニエミさんに風邪薬を処方するからね、服用方法はタピオくんが今、ご本人に説明してるから、コッパ、きみのしごとは……」

「はい先生、この機械のここをこうして、ああして、さいごにこのボタンをぼん、と」薬の種類や飲み方を説明した書類を作り、きれいに印刷してくれる機械にコッパは「ありがとう」、と言いました。

先生は、うんうん、と黙ってうなずきながらコッパのすることをながめています。診察室から出てきたおばあちゃんが、「カーラや、おまちどおさま、さ、お薬をいただいて帰りましょう」

「え、もう帰るの？ あたし、もっとここにいたい」

いやいやをするカーラちゃんを見ておばあちゃんは呆れました。

「ここは具合のよくない人が来るところなんだよ。おまえは病気でもなんでもないじゃないか」

でも一、と、カーラちゃんは横目でコッパを見上げました。ちょっと頬をふくらませ、それから、思いきって言いました。「コッパがつらそうなの。病気かもしれない」「そういえば——」レル先生が真面目な面持ちで腕組みをし、「なんだか元気がないな」

とたんにぱっと目を輝かせるカーラちゃん。「先生もそう思う！？ ほらおばあちゃん、先生も、そうだ、って！」、と胸を張って勝ち誇ります。

「ちょちょちょ、ちょっとー」コッパは慌てました。「ぼくは病気なんかじゃない！ 咳きもでなければ熱も高くない！ おなかだっって痛くない！ どこもなんともない！！」

けんめいに口走るコッパですが、先生はまるで聞く耳を持ちません。

「ま、今日は患者さんが少ないし、コッパはお休みにしよう。部屋で眠るなり、散歩に行くなり、自由にしていよいよ」

「やったー！！」大喜びでばんざいしたのはコッパではなくてカーラちゃんです。「お休みだよコッパ！ あたしと遊ぼう！！」

24.

カーラちゃんはばんざいの恰好のまま飛び上がって、コッパの首に抱きつきます。羽根のように軽いコッパを抱きかかえるようにして、外へ飛び出して行ってしまいました。「わーい！ さあ何して遊ぼう？ あ、あたしったらお腹がすいてる！ うちのパパに美味しいお昼ご飯作ってもらお！ ね、コッパもいっしょに食べよ！ それからそれから！」

翼の上からしっかり抱きすくめられてしまったコッパは身動きひとつできず、いやもおうもありません。短い脚をじたばたさせて連れ去られていくコッパを、レル先生はにこにこしながら見送っていました。

「先生！！」

「あー、タピオくん、ご苦労さん」

「先生！ 今日こそ教えてください。彼の動力源を！！」

「誰の？ 何だって？」

「あの妙なかたちのロボットがどうやって動いているのか、私は知りたいのです！！」

「その話かい？ 昨日も話しただろ。彼は魚を食べて動いてるんだよ——」

「先生！！」

「……………」

「五歳の幼児やお年寄りならともかく、アイノア大学を優秀な成績で卒業した私にそんなおとぎ話が通じるとお思いですか！？」

「で、では、どんな話なら通じるんだろう??」

急病のエマさんの代わりにタピオに、診療所にやってくる町のひとたちは無茶なことを言ったりしませんでしたし、さいしょは自信なさげだったタピオも持ち前の優秀さで、あっという間に自分の仕事を覚えてしまい、数週間とたたないうちに診療所のあるじのような気分になっていました。気持ちが落ち着いてくると、今度はいろいろな事が気になりだすもの。タピオの興味を引いたのは、ほかでもない。コッパでした。

コッパは誰のもの？

25.

「コッパは何が好き？」

カーラちゃんの質問にコッパはすかさず答えます。「魚」、と。

「お魚かぁ。あたしはちょっと苦手だな。だって、ホネがあるんだもん。コッパはへいきなの？ ホネ」

コッパは首を傾げます。捕まえた魚を丸ごと呑み込んでしまうコッパには、カーラちゃんが苦手な『ホネ』というものがわかりません。へいきなのかと聞かれれば、へいきなんだろうな、僕は、と思います。コッパがむずかしい顔をして考え込んでいるので、カーラちゃんは話題をかえようと思いました。

「あたしはねえ、オムライスが大好きなの！ パパは卵を二個とバターをたっぷり使って作ってくれるの。そりゃあおいしいんだから！ ね、コッパもいっしょに食べよ！」

タピオがやってきて数日たったころのある日。台所の冷蔵庫を開けたタピオがいました。「おや。卵がたくさんあるぞ。それも——賞味期限が昨日で切れている。どれどれ——ベーコンにチーズ——野菜庫に——ほうれん草、玉ねぎか。これだけあれば、キッシュが作れるじゃないか」

川の魚でおなかをいっぱいにして帰って来たコッパは、タピオが卵料理に腕をふるい、レル先生が「うまい！」と感想を言っているところを窓の外から見てしまったのでした。

「……コッパ？ どうしたの？ ほんとに病気なの？」

コッパはゆっくりと首を左右に振りました。空がゆらりと揺れ、地面がぐらりと傾きました。

「コッパ？ ——コッパ？ 待って——」

ずーっと、下の方から、声がしました。空の上には強い風が吹いていて、コッパの軽い体をさらっていきました。

26.

「先生先生先生！！ レル先生ってば！！」

診療所のドアが外からどンドン！ どンドン！ と叩かれています。大人の強い力ではなく、小さな子供が力いっぱい、叩いているのです。

なにごとだろうと、驚いたタピオが様子を見に来ました。

「きみはたしか、お昼前にやってきたアハマニエミさんの……」

「タピオさん！ レル先生は！？」

「先生は留守だよ。往診に出かけられたんだ」

「先生、いないの？」カーラちゃんはぜえぜえと喘ぎながら立ちすくみきました。とにかく先生に知らせなくちゃと、大急ぎで走ってきたのに。

「どうしたんだい？ だれか病気？ それともケガをしたのかい？」

両手を胸の前で握りしめ、ぶるぶると頭を激しく振るカーラちゃんを見て、タピオはなんともいやな予感がしたのです。

「い、いなくなっちゃったの」

膝に手をおき、「——誰が？」と辛抱強く尋ねます。まさか、昼前に診察にやって来たカタリナ・アハマニエミさんが家に帰っていないのか？

「コッパ！ コッパが！ 空を飛んでどっかへ行っちゃったの！！」

タピオは大きく息を吸い込み、「それは……一大事だ」、おごそかにいいました。

27.

タピオはカーラのおばあちゃんの風邪薬を奥の部屋で調合していたので、カーラと

コッパが連れ立って出かけていったことを知らないのです。なので、話がさっぱり見えません。そこで、取り乱すカーラをなだめて、ことのいきさつを聞き出しました。

「あたし、コッパを元気づけてあげたかったの」

「ふむふむ」

「いっしょにお昼ごはんを食べて、遊びに行こうと思ったの」

「そうか、それでコッパと出かけたんだね」

「うん。レル先生がコッパにお休みをくれたから」

「ふーん。それで、どうしてコッパは空を飛んでどこかへ行ってしまったんだろ」

「……どうしてかなあ？」

「きみにもわからないの？」

「わかんない」

カーラはコッパが飛んでいった方角を指さします。「あっち」、と。タピオはその方角に目をやります。その先には、山がありました。

(山、か)、と、タピオはひとりごちます。町と違って、山には道がありません。あっちの方角へ飛んでいったとわかったところで、おいそれと追いかけていくのは、むずかしいのです。そもそも、飛び去った鳥を再び取り戻すなんてことはできない相談だと、カーラに言って聞かせるべきか。あきらめなさい、と。

コッパの名を呼びながら泣きべそをかいているカーラをなだめながら、タピオは考えていました。なぜか、「あきらめなさい」、という言葉が自分の口から出てこないのです。

はた、とタピオは膝をたたきました。山にくわしい人がいるではありませんか！

ノーマンおじさん！

28.

デスクの上で電話が鳴っています。普段なら秘書が電話を取るのですが、あいにく、秘書はお昼ご飯を食べに出かけてしまい、ノーマン氏はしぶしぶと自分で手を延ばしました。気分はしぶしぶですが、声音は違います。なにしろ、どんな人からの電話かわかりません。精いっぱい優しく、「はい？」と言いました。

『もしもし！！ おじさん！？』

「——その声は——」

聞き覚えのある若い男の声に、ノーマン氏は思わず舌打ちをしました。とたんに、「タピオカ」と不機嫌に答えます。甥っ子にとっておきの優しい声を出したことが、ひどく損をした気分なのでした。

『おじさん！ 助けて欲しいんです！』電話越しの大声にノーマン氏は思わず耳から受話器を遠ざけました。

「助けてくれだと？ おまえのことはさんざん助けてやったぞ。天体望遠鏡が欲しいといえど買ってやり、旅行がしたいといえど飛行機の切符を買ってやり、勉強がしたいといえど学校へ入れてやり、働きたいといえど仕事先を世話してやった。今度はなんだ？ ははあ、わかったぞ、嫁さんがほしいというんだろ」

早口でまくしたてるノーマン氏が息継ぎをしようと黙ったところへタピオカは割り込みました。

『おじさん！ 話を聞いてください！ おじさんはピエニ村の東の岩山に何度も登ったことがあるでしょう？』

「……ピエニ村の東の岩山が欲しいのか」

『そうじゃありませんて！ あるモノを探すのを手伝って欲しいんです、行方不明なんです！』

ノーマン氏は顔をしかめました。「行方不明？ なにが？」

『鳥です。いや、鳥のロボット』

電話で話しているタピオの服をカーラが引っ張ります。「コッパは鳥じゃないよ、ケツアルなんとかっていうのよ」

「なんだって??」ノーマン氏は幼児の声にますます顔をしかめました。

『えーと、行方不明になってるのは、ケツアルコアトルスのロボットです。自分でそう言っていました。名前をコッパといいます』

29.

レル先生の診療所にいた、ふしぎな白いモノ。鳥のようで鳥でない、くちばしの先でおぼんをくわえ、お茶を出してくれた、(アレか)

(最近のロボットはじつによくできているものだ)

あまりにもふしぎな姿なので、ノーマン氏は率直にそう思ったのでした。

(アレが、行方不明だと?)

岩山登りの支度を整えながらノーマン氏は考えを巡らしています。ピエニ村の東にそびえる岩山を登山中に転がり落ちて、九死に一生を得たのは数年前のこと。応急処置をしたのがレル先生でなければ、死んでいたにちがいないのです。そう、レル先生は命の恩人。その恩返しはなんとでもしなければと思いつけてきたノーマン氏です。

(……しかし……)

実は、目下のところ、ノーマン氏は頭を悩ませていました。

(故郷の町にある遊園地……) 子どものころよく遊びにいった遊園地。楽しい思い出や懐かしい思い出がたくさんある遊園地ですが、お客の入りが悪くなくて倒産しかけているのです。

(できるものなら、わしのこの手で……) 買い取りたいのです。(買い取って、あれこれ手を加えて、かつての賑わいを子どもたちに味あわせてやりたい) けれども、お金が少しばかり足りないのです。

支度をするノーマン氏の手がふと止まりました。恐ろしい考えが頭をよぎったのです。その考えを振り払うようにノーマン氏はふるふると頭を振りまわりました。が、振り払っても、振り払っても、その考えはまとわりついてきます。薄い薄いビニールが指先にからむように。

(もしも……)

(あのロボットが自分から行方をくらましたのだとしたら……)

誰のものでも、もちろん、レル先生のものでもない。そういうことだろう？

30.

コッパがいなくなったとレル先生が知ったのは、往診の仕事が終わってからでした。先生は、「そうか」とだけ、言いました。タピオが拍子抜けするほどでした。

『工作中的先生にお知らせするのを後回しにしてしまったことはお詫びします。とにかく、すぐに彼を追いかけ、探さなければと考え、私なりに手を打ちました。おじのノーマンが岩山へ向かっています』

先生は、「ありがとう。感謝するよ」と言葉少なに答え、そっと電話を切りました。タピオは切れた電話を呆然と見つめたのでした。

飛ぶ練習をして、魚を捕まえられるようになったら。山へ帰るのはそれからだ。そういったのはほかでもない、レル先生自身でした。そしてそれは、コッパにとってごく自然のことだったはずなのです。

時期がくれば、自分が生まれ育った土地が恋しくなるにちがいない。そうしたら、コッパは自分から故郷へ帰っていくだろう。

(いつかは……) そんな時がくると、レル先生はそう思っていました。(ただ、思っていたより、ちょっと早かったな)

夕暮れの残照に橙色に染まっていく岩山を、レル先生は静かに見つめるのでした。

31.

とはいうものの。岩山へ向かったノーマン氏を放っておくわけにはいきません。すでに

夕暮れが近く、この時間に山へ入るのはとても危険なことで、行方の分からないコッパを探すどころか、逆にノーマン氏の行方がわからなくなるおそれがある。だから山へ入らないでほしい。レル先生はタピオを通じてノーマン氏にそう伝えました。

電話の向こう、小さな女の子が泣いている気配が伝わってきます。ごめんなさい、と言っているのです。

「ごめんなさいコッパ、ごめんなさいレル先生、あたしのせいで」

『泣かないで。カーラ。誰のせいでもないんだよ』

32.

岩山のふもとでノーマン氏はたたずんでいました。ぜったいに見つけてみせると意気込んで出かけてきたものの、たしかに日は西の空に傾いています。暗くなっていく山に入るなど自分が行方不明になるようなものだと、レル先生にいわれるまでもなく、ノーマン氏はよくわかっていましたが、どうしても立ち去りがたく、山をみあげたまま考え込んでいます。

そうです。考えれば考えるほど、（あのロボットが欲しい）、その気持ちがふつふつと膨らんでくるのを止められないのです。タピオを通じてのレル先生とのやりとりはもどかしく、ノーマン氏は直接、先生に電話をかけました。

レル先生は、『コッパは自分でいなくなっただけ。ならば、探して見つかるとは思えません』、そう言いました。

そこでノーマン氏は尋ねました。「先生はアレを取り戻したくないのですか!？」

『取り戻すものにも。コッパは最初っから私のものじゃありませんよ』
「なるほど」、とノーマン氏は別人のような低い声でつぶやきました。快活で人のいいノーマン氏の声ではありませんでした。

ノーマン氏の野望

33.

レル先生は切れた電話をしばらく呆然と眺めていました。そして顔をしかめてゆっくと頭をふりました。（いい人なんだけど）、と思うのです。

と、その時。先生の背後で車が止まる音がしました。バスでした。止まったバスのタラップを踏んで、ひょろりと背の高い男の人が降りてきます。男の人の目はレル先生をじっと見ていました。そして叫ぶように言いました。「レルじゃないか!？」

突然名前を呼ばれて先生はびっくりして振り向きました。「——ペイリー？」

男の人は日焼けした顔をくしゃくしゃにし、「やあ！ やっぱりレルだ！ いやあ！」笑いながら大股に近づいて来て先生の肩をどんとばかりに叩きました。先生が思わずよろけたほど強い力でした。

「久しぶりだなあ！ あいかわらずのいい男ぶりだなあ！」ペイリーという名の男の人

は、レル先生の手をつかんで振り回さんばかりな握手をします。

先生は声をあげて笑いました。「キミこそあいかわらずだ。ところで、どうしたんだ、いったい？」

「いやあ。なぜか急におまえに会いたくなってな。バスでとことことやって来た。で、ふと窓から外をみれば、なんとレルそっくりの男が苦い顔して電話をながめていたというわけ」

ふたりは友だちどうしで、ペイリーはレル先生を訪ねてきたのでした。先生は、今往診から帰るところで、午後の診察が終わったら時間ができるから、しばらく待っていてくれないかと言うと、ペイリーは「おうともさ」と、気さくにうなずきました。

ふたりはレル先生の車に乗り、先生の診療所へ向かいます。

「バスに揺られながら思ったんだが、その、えらく、のどかなところだなあ」

「祖父の故郷だよ。祖父が亡くなって、この町にお医者がいなくなってしまった。それでぼくがやって来た」

「何回か、聞いた。その話」道路の両側には麦畑が広がり、緑色の穂がさわさわと揺れています。緑の穂は畑の起伏のとおりゆるやかにうねっていました。

34.

コッパに休みをやるんじゃないかとレル先生は思いました。昼前は患者さんはアハマニエミのおばあちゃんひとりだけだったのに、先生が往診にでかけている間に三人やって来て待合室で診察開始時刻を待っていたのです。一人目の診察をしている間にさらに五人増え、二人目の診察の間にさらに二人増え、結局、えーと、なにしろ、えらく忙しいのでした。いつもはコッパが受付係をしているのが当たり前だったので、受付係

がいなくなってみると、先生もタピオも、あれもこれも、それもどれもと、てんてこ舞いなのでした。それで、タピオはぜえぜえと息を荒げ、ついに先生に泣きついたので。「やっぱりコッパを探しに行きましょうよ」と。

一方こちらは、友人を訪ねてきたものの、相手をしてもらえないペイリーさんです。お医者さんの仕事の邪魔をするわけにもいかないのです、そのあたりを散歩でもしてこようと外に出ると。診療所の前で五歳くらいの、金髪を三つ編みにした女の子と目が合いました。さんざん泣いたらしく、目が真っ赤に腫れています。泣きはらした目でじっと見つめてくるのでペイリーさんは、さて弱った、と思いました。なにか言わなきゃならないかなと思い、「えーとー、ここのお医者さんにご用かな」と声をかけてみます。すると、女の子はこっくりとうなずきました。「ということは、どこか痛いのかな」

女の子はまたこっくりとうなずき、両手を胸に当てました。女の子が、胸が痛い、はしばみいろの目に涙をためて訴えているのです。ペイリーさんはますます弱りました。（かわいい女の子が胸を痛めて泣きはらしているとレルのやつにとりつぐべきか、早くお家へ帰りなさいと言い聞かせるべきか）

そこへ救いの神が現れました。「カーラや」、と。こんこんと咳きをしながら。「病気でもないのに、またここへ来ていたのかい？」

カーラちゃんはやっとペイリーさんから目を離しました。「おばあちゃんこそ！ 病気なのに、出歩いちゃダメじゃない！ お熱が出るよ！」

女の子とおばあさんが、病気だ病気じゃない、帰ろう帰らないと押し問答を始め、その脇を診察が済んだ患者さんがよけて通っていきます。ペイリーさんは「あの一」と声をかけました。幼い女の子や風邪ひきのお年寄りが『またここへ来た』ということは、それほど遠くに住んでるわけじゃなかろうと思ったのです。「よかったらお宅までお送りしましょう。なに、私はあやしいものじゃありません。レルとは親友の間柄でしてね」

診療所を出て、十五分ばかり歩いてカーラの家に着きました。思ったほど近くないなとペイリーは思いました。大人の人がふたりくっついているのでカーラはあきらめてとぼとぼと歩きましたが、しょっちゅう空を見上げ、きょろきょろとしていました。

着いてみれば、カーラの家は小さなレストラン。真黒な地に無数の小さな銀色の星と銀色の三日月が描かれた看板。カーラの母親が店先に現れ、「どうぞひとやすみなさってくださいな」とふたりを送り届けたペイリーをねぎらいますが、カーラはドアをくぐろうとしません。「あたし、もうちょっとお外にいたいな」と言って。「ね？ あとちょっとだけ」

お店の外の石の階段に座ってひざを抱えているカーラの姿が窓から見えます。カーラの母親は外を気にしながらお茶を運んできました。「ご面倒をおかけしましたわ」とペイリーにお茶をすすめます。

「いやいや」ペイリーは気さくにこたえました。「カーラちゃんは、なにか、その、悩んでいるのかな」診療所の前で会った時の様子を思い出して、なにげなく、軽い口調でそう言ったのですが。

「そうなんです！」母親はまじめな顔で受け答えしました。「レル先生のとこのコッパがいなくなってしまう。カーラは自分のせいだというんです」

「——はあ？」もちろんペイリーにはなんのことやらわかりません。「レルのとこの？ コッパ？ なんですかそれ。ペット？」

ちょうどそこへカーラちゃんがやってきました。石の階段に座っていたらお尻がいたくなってしまったのです。「コッパはケツアルなんとかのロボットなの！」

ペイリーはカップを持ったまま軽く顔をしかめました。タピオから話を聞いたノーマン氏そっくりの表情でした。「ごめん、カーラちゃん、もう一回言ってくれるかな」

「だーかーらー。ケツアルなんとかなの！ ロボットなの！ 鳥でもないし！ ペット

でもないの！　とってもお利口で！　歌が上手なの！！」

カーラちゃんはむかむかして喚くようにいいました。ペイリーさんはカーラの話を見てない、と感じたのです。それほど胡散臭そうな顔をしていたのです。この人、嫌いだ、とカーラちゃんは思いました。そのペイリーは胡散臭げな顔のままつぶやきました。「ケツアルなんか？　ケツアル？　ケツアル？　そのロボットを作ったやつの名前か？」

なにをとんちんかんなこと言ってるのかしらと思ったのはカーラの母親。彼女は、はたと思いついて、小さな黒板を持ってきました。お店のメニューを書くための黒板です。「カーラ、コップの絵を描いてみせて。あなた上手じゃない」「いいよ」カーラちゃんはすぐさまチョークをつまみ、『本日のおすすめ』の下にコップの絵を描きました。長くとがったくちばしと涙型の目、小さな体。「あとね、大きな羽があるの。うーん、羽、むずかしいなあ……」

ペイリーはますます胡散臭げな顔になりました。「ケツアル？　——まさか——ケツアル……コアトルス??」

「うん。それ」「そう！　それですわ！」

36.

「信じられん……こんなロボットがいるとは……」

「ほんとうなんだってば！　お掃除だってお買い物だってできるよ！」

「家事ができる——？」

「コップはなんだってできるんだから！　とってもお利口なんだってば！　あたしの名前すぐ覚えてくれたし、エマさんのかわりにお仕事してるし、タピオさんよりずーっと親切だし」

「記憶力がよくて、コミュニケーション能力が高いって？」

「おじさん。信じてないでしょ」

「いやいや。いやいやいや」ペイリーは頭を左右に振りました。「凄すぎて信じられないんだ。それに、そんなハイスペックなロボットがなんでこんな姿をしてるんだ？」

ペイリーが興奮して難しいことを言いだしたので、カーラは鼻白んでちょっと後ずさりしました。

「どんな事情かわかりませんが、レル先生のところでしたんです。それが、今日、いなくなってしまうって」

「あたしのせいだよお」

「あなたのせいじゃありません！ 先生もそうおっしゃったんでしょ？」

「そんなのがいなくなったなんて、レルのやつ、ひとことも言ってなかったぞ！ なんて探さないんですか！？」

「さあ」、と今度はカーラの母親が鼻白んで後ずさりしました。

「コッパが自分でいなくなったんだったら、探しても見つからないって、探してもムダだって」

「レルのやつがそんなことを……？」

「ねえ、ママァ、コッパはどうしていなくなっちゃったの？ タピオさんにいじめられたから？ お仕事がつらかったから？ あたしのことが嫌いになったから？」

カーラの声は次第に細くなっていき、しまいには泣き声になっていました。

「どうしてかしらねえ。ママにもわからないわ」

「さよならも言わないでいなくなっちゃうなんて」カーラの言う通りだと母親はこっそり思いました。あの、『よくできたコッパ』が、なぜ？ と。

「わかった」とペイリーは立ち上がります。「レル先生ならいろいろ知っているはず。おじさんが先生をとっちめてやるよ。なにしろ、しんゆうだからね」

カーラはあまり信じられないと思いましたがしぶしぶとうなずきました。

ペイリーを店の外へ送りにでたカーラの母親がそっと打ち明けました。「じつは……」と。

「気になっていたことがあるんです」

「どんなことでしょうか？」

「コッパは、私がみるたび、大きさが違ったんです」

「……………」

「最初に見たときはこれくらいだったのに、先週、こんなになってて……………」

「……………」

「よくできたロボットというのは、大きくなるものなんですか？」

37.

夕暮れの町に雨が降り出しました。ペイリーはちらと空を見上げ、上着を脱いで頭からかぶり、駆け出します。早く帰って、親友と話さなければなりません。

玄関ドアに『本日の診察は終了しました』のプレートがさがっています。「なんだなんだ、親友を閉めだす気か」ぶつぶつ言いながら押したり引いたりしますが鍵のかかったドアはびくともしません。インターホンを押してみたり、ドアをこんこんこんと叩いたりしてみましたが誰も出て来ません。

「留守なのかなあ？ 俺のことを忘れちゃったのかなあ？？ おーい。レルくーん、いませんかー」ひとりごとを言いながら診療所の周りをうろうろと歩きまわっていると。

どこかから、ぶふうん、と低い、唸るような音が聞こえてきました。診療所の隣にガレージがあって、そのシャッターが開く音。出てきた車を運転しているのは。

「おーい」と、ペイリーは手を振り回しました。

「ペイリー！」レル先生が怒鳴るように呼びました。「どこへ行ってたんだ!？」

「わるいわるい。ちょっとそこまで」黙って散歩にでてレストランでお茶を飲んでいたことを話そうとすると、先生は手を振ってさえぎりしました。

「とにかく、車に乗って。急用なんだ」

いそいそと助手席に乗り込んだペイリー、「急用？ 急患かい？」

「——いや。そうじゃない」よく見れば、先生はお医者様の恰好をしていません。

「てことは——まさか。コッパが見つかったのか!？」

先生は思わず、ペイリーの方を見ました。「なんできみがコッパのことを知ってるんだ？」

「おい、前を見ろ。信号が赤だぞ」

急ブレーキで車はつんのめるように止まりました。

話を聞き終えた先生は、小さく頭を振って、なにも言いませんでした。黙ってしまった先生に、ペイリーは言いたいことがたくさんありました。が、何から言えばいいのかわからず、やはり黙ってしまいました。それで、しばらくしてからようやく尋ねました。

「ところで、急用って？」

「そのコッパを探しに岩山へ行った人物がいる。その人と連絡がとれない」

38.

車のフロントガラスに大粒の雨があたり、ワイパーがひっきりなしに行ったり来たりしています。その動きを見るともなく見ながらペイリーはつぶやきます。

「こんな天気だぞ。とっくに山から降りて、今頃風呂にでもつかっているんじゃないのか？」

「さっき、ノーマン氏の事務所に電話をしてみた。本人の携帯電話につながらなかったからだよ」

「そうしたら？」

「秘書が電話に出た。ボスと連絡が取れないとって困っていた」

「……そりゃ困ったな」

「ああ」

車は町を出て、しだいに山の中へ入っていきます。雨は強く、あたりは真っ暗。

「このあたりは山歩きにはもってこいの場所だ。特別な装備もいらぬしね。しかしこの奥の岩山となると――」

「装備も経験も必要ということだな」

「そう。ぼくは初心者だが、ノーマン氏はベテランなのさ。どこになにがあるか、どの季節はどんな天候か、よく知ってる。……はずなんだ」

「――レル。停めろ」いきなりペイリーが言います。「あそこに車が止まっている。ノーマン氏の車のナンバーは？ それと、懐中電灯貸してくれ」

貸してくれといいながらペイリーは勝手にダッシュボードをさぐって懐中電灯を見つけ出し、上着をかぶった格好で助手席を滑り出し、発見した車の中をのぞき込み、ナンバープレートをたしかめ、戻ってきました。

首を横に振って言います。「ノーマン氏のだ」。誰も乗っていませんでした。

レル先生は町の警察に電話をかけ、いきさつを話しました。山に入ったまま戻ってこない人がいる、と。

警察の人は言いました。「明日の朝、明るくなってから探しにいきましょう。今夜できることは何もありません。もちろん、あなたがたにも」

先生がノーマン氏の車を名残惜しげにいつまでも眺めているので、ペイリーは言いました。

「とにかく、うちへ帰ろう。レル、運転を代わろう」

39.

「岩山登りのベテランが。これから夜になろうという時刻に山に入るとは……」 そう口に出しながらペイリーは助手席の親友に目をやります。レル先生は閉じた瞼を片手の指で押えてじっとしていました。「おい、大丈夫か？」

「ああ。わるいな。ペイリー」

ふん、と、ペイリーは肩をすくめました。「最初っから俺を呼べばよかったんだ」先生は暗い中で苦笑いを浮かべます。ペイリーは改まった口調で、「なあ、教えてくれな
いか、その、コッパのことを」

「……コッパ……」

「カーラはロボットだと言っていた。それは本当なのか？」

「——違うよペイリー」

ペイリーは親友の言葉を辛抱強く待ちました。

「——コッパはロボットなんかじゃない。生き物だ」

はあ、とため息をつくペイリーです。

「レル、おまえなあ。そんな話を俺が信じると思うか？ 生きたケツァルコアトルス？

そんなものがこの世に存在するか？ いや、今のこの時代に、だ。彼らが生きていたのは実に六千何百万年もの時の彼方だ。どこかのだれかが作ったロボットだという方が、まだ現実味があるぞ」

「ぼくは、溺れかけたコッパを助けた。魚をつかまえたかったんだな。翼が裂けていた

のでうちへ連れて帰り、レントゲンを撮った。たいした治療もしないうちに数日で翼の破れは治ってしまった。しだいに人の目に触れるようになり、彼を見た者はたいてい、よくできたロボットだと言った。それは彼への賛辞、褒め言葉だった。繰り返しそう聞かされた彼は、自分でロボットだと思いこんでしまった」

「自分がロボットだと思いこんでしまった本物のケツァルコアトルス！」ペイリーの声は笑っていました。ひとしきり声をあげて笑い、ふっと息をついて、彼は続けました。

「子どもの頃、いとこが言った。『ペイリー、面白そうな映画があるよ。見に行こうよ』。あまり気乗りしなかったが、ついて行った。科学技術を駆使して現代によみがえった恐竜の映画さ。夜の密林、足音もたてずに獲物の背後に近づき、目にも止まらない素早さで飛び掛かり、一撃で仕留める。もちろん、優雅に植物を食べるおだやかな性格のもいる。が、肉食恐竜のあまりの醜さ、あまりの獰猛さ、あまりの賢さに、子どもだった俺は震えあがり、声をかぎりに泣きわめき、そして、魅了された。それからというもの、こ難しい恐竜の名前を片っ端から覚え、気がつけば両親も呆れるほどの恐竜マニアになってた。もっとも、俺の心を奪ったのは、映画で主人公を演じた俳優だったかな。だって、そりゃあかっこよかったんだ！」

雨がしの降る夜の山中は、その辺に恐竜がひそんでいても不思議ではない雰囲気です。

「恐竜に憧れ、俳優の大ファンになり、俺は大きくなったら恐竜が棲む世界を探検するんだ。冒険家になるんだと心に決めた」

ペイリーはけろりと言いました。今のペイリーは恐竜を研究する本物の学者なのです。

40.

「恐竜マニア、か。キミにだけは知られたくなかった」

レル先生をつぶやきにペイリーは笑いながら、ふんと鼻を鳴らしました。

「まったくなあ！ 発掘現場が何十年かに一度の大雨で、水浸しになり、化石が流れてしまった。さて弱った、と頭を抱えていたら、ふとおまえが呼んでいるような気がしたのだ」

「べつに呼んじゃあいないよ」

「我ながら自分の勘のよさにおどろくよ。まさかおまえが本物のケツァルコアトルスと知り合いだったとは！」

「……キミの勘はけっこう当たるものな」先生の声には皮肉な響きがありました。ペイリーはそれを無視するように、

「その本物のケツァルコアトルス——」「コッパ」「そのコッパが、作り物ではないという根拠は？」

「根拠？ そうだなあ」レル先生は腕組みをして車の天井を見上げました。

「おいおい、これから考えるんじゃないだろうな」

「まさか。いくらでもあつて迷ってるんだ。そう——彼が作り物ではない、生き物だという証拠はいくらでもあった。それこそ朝から晩まで、つまり日常的にね。ペイリー、キミも彼と一日いっしょにいてみればいい」

レル先生の話し方がしだいに熱っぽくなってきたので、ペイリーはなんだか、からかいたい気分になりました。

「彼をロボットだなんて決して思わないだろう。そうだ、いっしょにいるとそう感じるんだ。彼の気配というか、存在というか、彼が、そこにいる、ということ」

からかいたい気分をちょっと横にどけて、ふーむ、とペイリーは思いを巡らせまし

た。ペイリーには普段よく使っている機械があります。ペイリーにかぎらず多くの人が、テレビやパソコン、電子レンジや持ち歩ける電話機などなど、ロボットとはちよつと違いますけれども、普段、そういったよくできた機械がすぐそばにあるでしょう。（だが）とペイリーは考えたのでした。（どんなに長い時間をかけて慣れ親しんだパソコンや車でも、気配を感じたりは、しないよなあ）、と。

レル先生は話し続けます。「時々、どこかで歌を歌っている。気がつけば、ボクが困っている時だったり、へとへとにくたびれている時だったりする。歌声が聞こえてくるとぼくは、ほう、っとして、なんとかなるだろうと思ったり、なんとかしようと思ったりする。いつの間にかほほ笑んでいる……」

「レル」

「ん？」

「そいつ、生き物じゃないな」

「……………」

「天使だ」

41.

「それはそうと、行方不明中のノーマンという人だが、実業家だといわなかったか？」

「そう、たいそうな資産家らしい」

「ふーむ……」ペイリーは何事か考え考え、指先でせわしなくハンドルを叩いています。「レル、コッパはロボットだ」

「——は？」

レル先生はゆっくり言いました。「ペイリー、なんなんだいったい」

「実業家で、金持ちで、岩山登りのベテランで、まあ、そういう現実的なじいさんが、なんだって遭難しそうな時刻にわざわざ山へ登ったんだ？ なにか思惑があったんじゃない？」

「思惑、って？」

「話を聞くかぎり、生き物にせよ、ロボットにせよ、おまえのコッパはカネになる」

「おいペイリー……」

「まあ聞け。生き物にせよ、ロボットにせよ、ケツアルコアトルスにそっくりだという。この世に存在しえない、ありえない姿だということが問題なんだ。生き物としての彼を巡って、あるいはロボットとしての彼を巡って、人々の間で今に奪い合いが起こる。その意味でカネになると」

「それはキミの勘か？」

「そうじゃなくて。容易に想像できるんだ。現にこの俺だって、カネが足りないばかりに諦めなければならなかった発掘がある。気前のいいスポンサーを見つけるのはティラノサウルスの全身骨格を見つけるより難しいんだ——」

はっ、と、ペイリーは口をつぐみました。

「いや、えー、俺はほんとにおまえが困ってる気がして、それで、飛んできたんだ、それはほんとにほんとだ、信じてくれ」

二人の沈黙は気まずいくらい長く続きました。やがて……

「キミの忠告を本気で聞かなかったばかりに、ぼくの目は外科医として役に立たなくなってしまった。信じるとも。ペイリー」

「……レル……」

レル先生はふと周りに目をやりました。

「おい——ペイリー——」

「——なんだ——」

「道が違う」

「ええっ？ ——うわっ」

ペイリーは悲鳴をあげました。車のライトが夜闇に吸い込まれずに、何かに跳ね返されているではありませんか。それは大きな大きな岩でした。崖が崩れて道を塞いでいたのです。

泡をくったペイリーはブレーキをかけました。が、雨でぬかるんだ泥の道にタイヤはいうことを聞きませんでした。横にすべりながらぐっしょりと濡れそぼった草の上に乗る上げ、そこいら中に散らばる鋭い石を踏んでバランスを崩した車は崖の下へと転がり落ちていきます。

42.

「いやっほう！」

「うれしそうだねペイリー」

「だって！ 崖から転落だぞ！ 失われた世界へレッツゴーだ！」

レル先生は呆れて言葉もありません。

「それはそうと、今のうちに言うておくぞ！」

谷底へと転がっていきながらペイリーはわめきます。

「コッパはロボットだ！ だんじて生き物なんかじゃない！ そういうことにしておけ！！」

ふたりは深みへと落ちていきました。

ペイリー、心を悩ます

43.

車がおしゃかになっちゃったな、とペイリーは考えます。レル先生の故郷の人たちはとても長く、ひとつの車を使います。そういうお国柄なのです。レル先生の車も先生のおじいさんから譲り受けたものなのです。

(ものもちがいいというかなんというか。ガレージは最新式の電動シャッターなのに、よくもまあこんな古い車をつかっていたもんだ。しかしこれだけ壊れてしまえば、レルも諦めがつくだろ)

フロントガラスに大きくひびが入っているのがみえます。ひびのせいで外が見えません。体を起こそうとして、ペイリーは思わずうめきました。体が動かない。足が何かに……たぶん、壊れた車の部品に……はさまれてしまったようで、どうやっても動かないのです。動かない足を動かそうとすると、悲鳴をあげそうなくらい痛むので、だんだん頭がはっきりしてきました。

(そういえば、レルはどうした——)

と——

こんこん

こんこん

(なんの音だ)

誰かが助けに来てくれたのでしょうか。けれどもあたりは真っ暗闇。車のライトも消えてしまっているのです、本当に真っ暗闇なのです。夜の山中で道を外れて崖から落ちた

車を、いったい誰が見つけてくれるというのでしょうか。

(じゃあこの音はいったいなんなんだ。フロントガラスをノックしてるのは、いったい誰なんだ——)

ぞっ——と、ペイリーは鳥肌がたつのを感しました。

(まるで——いつか観た映画のようじゃないか——)

じっとりとした密林。静かな闇に紛れ、口の端からよだれの糸を細くひき、冷たいまなざしで獲物の動きをじー、っと、観察する肉食の恐竜。その場面を細かいところまでまざまざと思い起こして、ペイリーは冷たい汗がこめかみを流れるのを感しました。

ぱり、と、くぐもった音がして、フロントガラスに小さな穴が開きました。

44.

こんこん

こんこん

と、音は続き、小さく開いた穴は広がっていきます。まちがいありません。誰かがフロントガラスを割ろうとしているのです。そして今にも割れた穴から鋭いかぎ爪が——

ぱり、と、またくぐもった音がして、小さな穴はひび割れもろともフロントガラスの

端っこに手のひらくらいの幅の亀裂になって、割れたガラスがばらりと落ちてきました。そこから何か白いものが入ってきます。ペイリーの心臓は早鐘を打ち、思わずあとずさりしようとしたのですが、動くことはかないません。身動きできずに白いものの動きを目で追っていると。

(——鳥?)

長く突き出したくちばし。(——鶴? 白鳥? 白いカラス? はて、こんな鳥がいたっけか? 夜行性のフクロウでもなさそうだ。なんだ——こいつは——)

フロントガラスを割って車の中に入ってきたモノの姿に、ペイリーは目を疑いました。

細長い頭のほとんどはくちばし。涙型の目はどこか機械的で、ロボットかなにかのようです。続く体は頭部より小さめなのですが、体の両側に翼を折りたたんでいるのがわかります。ペイリーの目を奪ったのは、たたんで半分に折れ曲がったその翼の、先端についた手のようなもの。

その白いものは、後ろ脚と手のようなものとの、つまり、四本脚で歩いてダッシュボードの上に立ったのです。

ペイリーは思わず悲鳴をあげそうになりましたが、白いものが、くいと頭を動かしてこっちを向いたのであわてて目をつむりました。こういうときは死んだふりが一番です。

白いものがダッシュボードの上から助手席の方へ首をつきだすのをペイリーは薄目の横目で見ていました。白いだけに、闇のなかでもよく見えるのです。そいつは首をかたむけ、しげしげと助手席のある暗がりを見ています。

その時。低いうめき声がしました。それに答えるように、白いものはくちばしを開きました。そのくちばしから、「レル先生なの?」と言葉がでてきたものですから、ペイリーは死んだふりがムリなくらい、たまげました。けれどもふりを続けなければなりません。もっと、よくよく、この白いものを観察するために。

45.

「これは夢だね。コッパがこんなところにいるわけがない」

「先生？ 僕はコッパだよ！ しっかりして！」

「……ああ……」

「先生？ どこか痛い？ どこかケガしたの？」

「ケガ？ いや……ケガをしたのはぼくじゃない。ぼくは彼らを……ケガをした彼らを助けに行こうとして……電話がかかってきた……行くな、という電話だった。その時ぼくは中東に、ペイリーはゴビ砂漠にいた。砂漠の真ん中から電話してきたんだ。ひどく切羽詰まった声で……そこから動くなという。イヤな予感がして大急ぎで電話したというんだ。ぼくは急いでいた。イヤな電話をしてくると怒鳴って電話を切った。医療器具をかついで駆け出し、建物から外へ出たところで……光が……突き刺さるような閃光……なにも見えなくなった。それで……助けが必要な彼らのところへ……行けなかった……」

途切れ途切れに先生は話しました。夢の中をさまよっているような話し方で。

首を傾けて聴いていたコッパはやがて決然といいました。「僕が助けを呼んでくるよ、先生」「……うん？」先生の声は眠そうでした。

「町までひとつ飛びして、助けて、って誰かに頼むんだ。大丈夫、任して。先生はここでじっとしてて」

コッパの白い体がガラスの破れ目から出て行こうとするのを見て、ペイリーは思わず身じろぎし、声をあげました。「ま、待て！」

「な、なあに！？ 誰！？」

「ああ、おどかしてすまん。俺の名はペイリー、たった今、レルの話にでてきた、イヤな電話の男さ」

コッパはちょっと身構えました。「たしかに先生はそう言ったけど。あなたがその人本人だという証拠は？」

ペイリーはぐっと詰まるやら、面白がるやら。

「それはそうだ、きみはなかなか頭がいいな」

「おだてたってだめだよ。ひとの話をこっそり聴いてる人を、僕は信じない」

ぴしゃりと飛んできた言葉にペイリーは、心がわくわくとおどりがあがるのを感じました。

「そりゃわるかったが。真っ暗闇で車に閉じ込められているところにいきなりきみがやって来た。俺だって、なんだこれは、って、警戒すると思わんかね」

コッパという名の、この白いものから、なにか返事が返ってくるだろうか。ペイリーはほとんど期待はしていませんでした。いえ。というより、期待することを恐れたのかもしれない。コッパはしばらく間をおいてから口を開きました。

「僕が知っている限り、レル先生は夜、出かけたりしない。そんな先生が、こんな夜中に、なぜこんなところにいるの？ それに、この車は、先生がふだん、往診に行く時につかっている車だ。なのに、なぜあなたが運転席にいるんだろう」

ペイリーの心はもっとわくわくと踊りあがります。

「コッパ、さっきの話を思い出してほしい。レルはある時、目を傷めた。閃光弾の攻撃を間近に受けた彼は目を傷めてしまった、今の彼は田舎で町医者をやっているが以前は外科医だったことを、きみは知っているかい？ ひじょうな注意力と繊細な目の力がある仕事なんだ。レルは優秀な外科医だった。強い正義感と、旺盛な好奇心と行動力とを兼ね備えた外科医だった。中東の紛争地帯が彼の仕事場だった。しかし、光が彼の視力を奪った。助けが必要な人々のところへ駆けつけることができなかった。それで彼は前線を退いて田舎に引っ込んだんだ。そんなわけで夜はもっと目の力が落ちるからね、彼が夜でかけたりしない理由はそれだ。それからきみの二つ目の質問だが、彼の友人が山

で行方不明になったようだ。それで夜になろうとしているにも関わらず、探しに出かけたのさ。彼の目の状態を知っている俺は途中で車の運転をかわった。おかげで崖から落ちたがね。さて、わかってもらえたかな」

46.

小さな鳥みたいなものを相手に俺はなにを必死になって親友の過去を披露してるんだろう。ペイリーはそう思いました。そう、壊れてしまった車と外の世界をつなぐのは今のところ、コッパという、この存在しかいないからです。

そしてコッパの言い方はいじわるでした。「わかったかどうか、わかんない。あなたの話を証明するものはなにもない」

ペイリーは苦笑しました。「昔からよくいわれたっけなあ。おまえの話は信用できない、と。人相もよくないしな。おかげで映画俳優にもなれなかった。男前のレルなら楽勝だったろうに」

「そうだね」

ふしぎなことに、ペイリーはかちんときたり不愉快な気分になったりするより、もっとわくわくしてくるのでした。

ペイリーの自虐的な物言いに「そうだね」とけろっと返し、ごく自然な仕草でくちばしの先で翼をつついて羽繕いをしているコッパに、ペイリーは衝動的に言いました。

「きみはたいしたロボットだよ」、と。

「そうさ。僕はお利口なロボットさ」すましてそう返すコッパに、ペイリーは暗闇でくこくとうなずきながらいいました。「うむ。そのことを忘れるんじゃないぞ、ぜったいに」

「で？ 僕はいつまで待てばいいの？ 早いとこ、行きたいんだけど」

「助けを求めると言ってたな。誰に？ 当てはあるのか？」

「……タピオさん、かな」

「何者だ？」 「レル先生のところでお仕事してる人」

「そうか、医療従事者だな、いいかコッパ、そのタピオに言うんだ、車が崖から落ちて、ふたりが閉じ込められていると。ひとは潰れた車体に足を挟まれ、ひとはどうも頭を打っているようだ。急いで助けてくれ、と。言えるか？」

羽繕いをやめたコッパはペイリーの方へくちばしを向けました。「できるよ」

「よし。えらいぞ。そこで、ちょっと教えてくれないか。この車が、えー、きみが外側から見てどんな様子なのか」

「崖の途中で岩場に乘っかっている」

「なんだって？ 谷底にいるわけじゃあないのか！？」

驚くペイリーを尻目に、「じゃあ、僕は行くからね」ガラスの破れ目をすりとくぐり抜けていくコッパに、ペイリーは大声で、「コッパ！ くれぐれも忘れるなよ、きみはロボットだってことを！ タピオにもそう言い張れ！」

よびかけたとたんに車はぐらりと傾きました。

悲鳴をかみ殺しながらペイリーはつぶやきました。「誰にも捕まるなよ、コッパ。ぜったいに、誰にも」

47.

その晩。しとしとと雨が降り出したころのこと。トーマ坊やお父さんの膝にのっかってせがみました。

「お父さぁん、ぼく、お誕生日のプレゼント、決めたよ」

「おやおや」、とお父さんの頬は緩みます。「プレゼントを自分で決めたのかい。なかなか頼もしいぞ、トーマ。で、なにが欲しいのかな」

「ろぼっと」

「……え？」

「ろぼっとだよ。ろぼっと、お父さん知らないの？」

「いや、その、知らなくはないけどね」

小さなトーマ坊やお父さんのお仕事のことをよく知りませんでした。お父さんはシステムエンジニアという、コンピューターの関係のお仕事をしていました。おうちの中の仕事部屋へはトーマ坊やが入ってはいけないことになっているので、お父さんがそこで何をしているのか、坊やは知る由もありませんでした。

「知らなくはないけど、トーマはどんなロボットが欲しいのかな。お父さんに教えておくれよ」

「えーとね」トーマ坊やが手振り身振りでお父さんに教えようとしています。両手で長いくちばしを作り、翼を作り、両手と両足を床について、四本足でそこら辺を歩いて見せます。お父さんは腕を組んで顔をしかめています。トーマのゼスチャーはどうも鳥のようなのですが、お父さんは（お父さんでなくても）四本足で歩く鳥というものを見たことも聞いたこともありません。坊やはそれを、見た、というのですが、その姿形がとても信じられません。なんだかまんが的だと思うのです。ロボットと言っても子供向けのおもちゃだろうなど。まあ、実物を見てみないと。あるいは、テレビのコマーシャルを。

「ねえ、あした見に行こうよ」

「あしたねえ。どこへ行けば見られるんだい？」

翌日レル先生の診療所へ朝いちばんに行ってロボットを見せてもらおうと約束をして、大喜びのトーマ坊やが眠ってしまうと、お母さんは不機嫌にぼやくのでした。

「あんな不気味なもの、どこがいいのかしらね。お父さんもすっかり乗り気になっちゃって。気が知れないわまったく。あんなのがうちへ来たら……おおいやだ！ ぶるぶるぶる」

けれども、翌日、診療所のドアは開かなかったのです。

48.

システムエンジニアのキュトラ氏が息子のトーマのゼスチャーに頭を悩ませているころ。診療所ではタピオが留守番をしていました。いったん近くに借りているアパートへ帰ったものの、どうしても心配で戻って来たのです。

ノーマン氏を探しに出かけていったレル先生はちっとも帰ってきません。時間を持てあましたタピオは、かといってテレビをつける気にもなれず、掃除をしようと思立ちました。そしてあるものを見つけたのです。整理棚の上の方に置かれた封筒。一枚の大きな封筒。中は――（レントゲン写真？ 患者さんの？ ほかのはちゃんと保管庫に入っているのに、これだけ、なぜ？）

いぶかしみながらタピオは数枚の写真を取り出し、デスクに並べました。並べているうちに手が震えてきました。そこに写っていたのは、タピオが見たこともない生物の骨格だったのです。封筒に目をやれば、わりと最近の日付といくつかのアルファベットの連なりが流れるような筆記体で書かれています。

なんて書かれているんだろうと、タピオはアルファベットを細めた目で追います。そ

のうち、ふと思い立ってパソコンのスイッチを入れ、一文字一文字打ち込み、ぼん、と『検索』ボタンを――

口をぽかんと開けて検索結果が映し出した画面をながめます。タピオのメガネがずり落ちました。（コッパ――？）

あのコッパによく似た、鳥のような生き物の絵が次々と現れたのです。そしてたった今打ち込んだアルファベットの連なり、『*Quetzalcoatlus northropi*』のつづりが正しかったこと、それを『ケツアルコアトルス・ノルトロピ』と読むのだという事を知ったのです。

「中生代から白亜紀末に生息した翼竜。翼指竜亜目（プテロダクティルス亜目）中のアズダルコ上科アズダルコ科に分類される」タピオは声に出して解説を読み上げました。「現在知られる限りで史上最大級の翼竜であり、同時に、史上最大級の飛翔動物である」、と。

そうなんそうなん、またそうなん

49.

「タピオさんのアパートへ行くところだったんだ」とコッパは言いました。「でも診療所に灯かりがついてたから、あれ？　と。タピオさんが留守番してくれてたんだね」

はあはあ言いながらコッパは冷蔵庫を開けて水の入ったペットボトルを持ってきました。器用にふたを開け、くちばしでペットボトルの口をくわえ、ボトルをさかさまにしてごくごくと水を飲んでいきます。

タピオの頭の中は『ケツァルコアトルス』、『ノルトロピ』、『翼竜』、『アズダルコ上科アズダルコ科』、『史上最大級の飛翔動物』『Q (コッパ)』は『Quetzalcoatlus』の頭文字、といった言葉がぐるぐると渦をまいていましたが、冷えた水を一気に飲み干し、げほげほとむせかえっている姿をみると、妙な気持ちになってきます。それで、「おちつけ」と声にだしました。コッパに。そして自分に向けて。

「私のアパートへ行くところだったって？ 私に用があったのかい？」

「そうなんだ、たいへんなんだ、タピオさん！」

コッパの話を聴いて、タピオはびっくり仰天。ノーマン氏に続いて、レル先生とその友人とは、まったく二重遭難ではありませんか。警察へ電話して一部始終を説明する傍らで、まじめな顔つきで「そうなんだよ。遭難だよ」と相づちをうっているコッパの様子なんだからおかしくて、事態の重大さにもかかわらず、つい笑いがこみあげてしまうのです。

『もしもし？』と、当直のおまわりさん。『あなた、笑ってませんか？ まさかいたずら電話じゃないでしょうね？』

「ああああ、失礼、私ちょっと風邪気味でして。ごほんごほん」

『……言っときますけど、警察をからかうと罪が重いですよ。それでねえ、えーと、なんだっけ、ああそうだ、事情を確かめさせてもらいますが、最初に行方がわからなくなったのは、アヒルッパ・ノーマン氏で』

「あの一、アヒルッパじゃなくて、アルヒッパです」ぽかんと口を半開きにしたコッパの顔がおかしくて、タピオは必死に笑いをこらえます。

『……アルヒッパ・ノーマン氏を探しに行ったレル医師とその友人までもが行方不明になった、と。その友人という人の名前は？』

「ペイリー。フルネームは知りません」

『レル医師とペイリー氏はノーマン氏捜索中に崖から転落、車は大破しつつも岩場に引っかかっている。レル医師は頭を打ちペイリー氏は脚を負傷している模様……ずいぶん、詳しいですね』

50.

『車が崖から転落して岩場に引っかかっている。中に負傷者が二名とは。あなた、自分の目で見てきたんですか？ こんな雨の真夜中に』

「見てきたのは私じゃありません。うちの、えー……」コップが電話機とタピオを交互に見ているのが目のすみっこでわかりました。

『おたくの？』おまわりさんの声がだんだんと投げやりになってきました。

「うちの、ロボットです」

『……………ああ、ロボットね』コップの耳に、かしゃっと小さな音が聞こえました。おまわりさんがペンを紙の上に投げたのです。

「うちにはそりゃあ優秀なロボットがいるんです、本当です！ ……あ、こら、待て！！」タピオの必死の声をあとに、コップは診療所を飛び出しました。『こんな雨の真夜中に』、灯かりがこうこうとついている建物はあまりありません。（あれだ）それこそひと飛びでコップは警察署にたどり着きました。窓越しに、受話器を片手にうんざりとした様子でもう片方の手をひらひらと振り回している若いおまわりさんが見えました。コップの鋭い耳にその声が聞こえてきます。タピオと電話で話していた、あのおまわりさんの声に間違いありません。コップは空中でいったん止まり、息を吸い込み、窓

に向かって力いっぱい、声を投げつけました。「おまわりさん！！」と。その声は窓ガラスを割ってしまいました。

いきなり窓ガラスが割れ、何かが室内に飛び込んできたと思ったら、目の前のデスクにすくと立っていたのですから、イソマキ巡査は思わず悲鳴をあげ、受話器を落っことし、イスに座っていたにもかかわらず、腰を抜かしました。

悲鳴を聞いたタピオが電話の向こうでなにか叫んでいます、目の前のモノに目が吸い付いてしまい、目をはなすことができません。

「なななななな、なんだ一、おまえは一」

「ねえおまわりさん、タピオさんの説明は全部本当なんだってば！　ぼくがこの目で事故現場を見てきた！」

「ロ、ロボット……？」

「レル先生もペイリーさんもケガをして車に閉じ込められてる！　早く行って二人を助けなきゃ！！」

真正面からくちばしが迫って来て、イソマキ巡査はイスごと後ずさりしました。

「ロボット？　ほんとに？」

「ねえ！　ぼくの話聴いてた！？　もいっかい、言おうか！？」

イソマキ巡査は、相手がすっかり興奮して、そのうえ、怒っている、と感じました。ロボットが興奮し、怒りに燃えるものなののでしょうか。それでさらに尋ねたのです。

「ほんとにロボット??」、と。

すっかり頭にきてしまったコッパはぐるりと頭を巡らし、地図が映し出されている画面を見つけました。壁にかかった大きな画面で、町とその周辺の地図。コッパはその画面の前にぴよんと飛び移り、「ここ！！」とくちばしで指し示しました。

イソマキ巡査は反射的に飛び上がり、叫びました。「モニターをくちばしでつつくんじゃない！！」

が、遅かったのです。コッパの怒りに燃えた鋭いくちばしは勢い余ってモニター画面

を突き破ってしまったのでした。

ぱしっと火花が走り、ぶつっと音をたてて、地図を映し出していたモニター画面は暗くなりました。

51.

イソマキ巡査とコッパは言葉もなく、暗くなったモニター画面を呆然と見つめます。

し……ん、と静まり返った室内。と、誰かが咳ばらいをしました。それでコッパは、室内にいたのがお巡りさんがひとりではなかったことに気がつきました。イソマキ巡査のようなお巡りさんの服装ではありません。警察の人ではなさそうです。が、イソマキ巡査に負けず劣らず、抜け目のない目をしています。その人はかけていたパイプイスからゆっくりと立ちあがりました。「だいじょうぶ」、とかすれた声で言います。頭はみごとに禿げ上がっています。「きみが刺した、いや、指し示した場所だがね、先週、大きながけ崩れがあった場所に近い」

「岩がごろごろしてたっけ。なんで知ってるの？」

「私が取材に行った」

見た目はぱっとしないけれども、抜け目のない目をしたその人は新聞記者だったので

す。「場所はわかった。彼が言ってることに間違いはなさそうだ」ハユハ記者はイソマキ巡査にうなずきかけました。巡査は目が覚めたように、受話器を取って電話をかけ始めました。

「大丈夫」、とハユハ記者はコッパに声をかけます。「あとは警察にまかせなさい。ただし、捜索は外が明るくなってからだ。さもないと、探す方の人が遭難してしまうからね」

イソマキ巡査は、自分が当直に入る直前に、ノーマンという人が山で行方不明になっているとレル医師から通報があったことを知りました。

52.

警察が捜索の準備をしているとの知らせをもらって、タピオはコッパを迎えに警察署へ向かいました。診療所の玄関に『今日は休診します』のプレートを掲げて。

夜明けまで三時間ほどあります。でも、とても眠る気にはなりません。眠っていないのは自分だけではありません。コッパもなのです。

タピオはコッパの骨格のレントゲン写真と一緒に入っていたメモを思い出したのです。レル先生の走り書きの文字はこう書いてありました。『ケツアルコアトルスの幼生。体温調節は未熟』

警察署へ行く前に、タピオは寄り道をしました。市場です。果物、野菜、肉、魚、大抵の食べ物は町の市場を通してお店に並ぶのです。お店に並べるために、市場はかなり早い時刻から開いています。まあ、お店が開くにはまだずいぶんと時間があつたので市場を覗くことを思いついたのでした。初めて覗く場所だったので、さんざんきよろきよろうろして、やっと目指す場所を見つけました。そこは、『鮮魚部門』でした。新鮮なお魚を扱っているのです。お魚といっても、海の魚、カニやエビ、川の魚などなど、種類がたくさんあって、タピオは呆然としてしまいました。どれを選んでいいのか

わからないのです。「あれとそれとこれ！」と、買い慣れている人たちに混じって迷っていると、「おや！」と声をかけられました。「診療所の人じゃありませんか」、と。

「え。私をご存じで？」

「知ってるもなにも。こないだ、風邪薬をだしてくれたじゃありませんか」

「そ、そうでしたか！ それは毎度どうも」

鮮魚部門のおじさんはからからと豪快に笑いました。「それはそうと。ここんとこ、おたくの先生の姿を見ないんだけど」

タピオは思わずおじさんの顔を見ました。

「しょっちゅう、魚を買いに来てたのにさ。なんでも、朝早く岩山へ散歩に行って、それからここで魚を買って、しっかり朝ごはん食べてから仕事なんだって、そう言ってたよ。どうしたの、先生、風邪でもひいたの？」

「ええ、まあ、あの——うちの先生、しょっちゅう魚買ってたんですか」

「ああ、しょっちゅうね」

「先生が買ってたのはどんな魚？ 買ってきてくれって、頼まれたもんで」

「あ、そうだったの。えーとね、川魚だよ、それも東の岩山の奥の、溪流で獲れるやつでね」

「それだ！ それをください！！」

「あー」、と鮮魚のおじさんはえらく渋い顔をタピオに向けたのです。

「それがねえ。今朝は、ないんだわ」

「え——どうして」

「猟場へ行く道路が通れないんだよ、がけ崩れがあったんだ」

「さっきまで興奮してそのへん歩きまわってたんだけどね」

タピオは毛布に包まれてぐっすり眠っているコッパを手渡されました。

「外側から窓を破って、飛び込んできた。雨の中を飛んだんだろう、びしょ濡れだったんで、とにかく乾かした方がいいと思ってね。毛布？ ここの留置場のを借りた」

禿げ頭のおじさんはコッパが大事そうに抱きかかえられるのをじっと見ていました。そして、「それにしても」、とタピオに話しかけます。

「興奮するロボットというのを見たのは初めてだよ」

禿げた頭によれよれの上着を着た、見た目があまりぱっとしないおじさんから新聞記者の名刺をもらったタピオは、毛布の中のコッパが気になるふりをして、返事をしませんでした。

もしも——コッパが新聞記者の興味を引いたとしたら——新聞にコッパの写真が載ったとしたら——ひょっとしたら、レル先生の診療所はいちやく名前が知れ渡るかもしれませんが——ついでにタピオ氏の名前も知れ渡るかも、かもしれませんが——それはいいことなのか——それともよくないことなのか、はたまた、どうでもいいことなのか——コッパのふしぎな姿形や人の言葉を話す能力が世の中の人たちの興味をかきたてないわけがない、とタピオは思うのです。はたして、禿げたおじさん、もとい、ハユハ記者はこう尋ねました。

「じつに興味深い。いったい誰が彼を作ったんだろう。タピオさん。あなた知りませんか」

タピオは知っていることだけを言いました。「なにも知りません」と。それからちょっと肩をすくめ、「そんなに興味をもたれるようなモノですかねえ。たしかにコレは興奮しやすいですよ。しかしそれは、エネルギーのコントロールがうまくいかないと、回路の設計に問題があるとか、そういう技術的なことにすぎないと、私は思います」

そう、つまらなさそうな口ぶりで言うのでした。ふむふむと聴いていたハユハ記者、しばらく間をおいて、ぼんと膝をたたきました。

「なるほど。そういうことなら、じつはわたし、そういうことにくわしい人を知ってます。職業はシステムエンジニアですが、この人がまた、大のロボット好きでねえ。そうさそうさ、彼に聞いてみればいい！」

54.

「……ツッパ、……コッパ、……コッパ！」

ぼっ、と涙型の目がほのかに明るくなりました。タピオはほっとして引き続き小声で話しかけます。「よかった、目が覚めたね」

「ああ……タピオさんか……」コッパはほうっと息を吐きました。「どうしたんだろ、ぼく……」

「ひどくうなされてたよ。怖い夢を見たんだろう。あんまりつらそうだったから起こしたんだ」

「怖い夢」コッパはタピオの言葉を繰り返しました。「怖いというよりもね、辛くて、悲しくて、なんにもできなくて、じたばたするしか……。でも目が覚めたらみんな消えちゃった」夢見るようなぼんやりした口調でコッパはつぶやきました。

「夢ってそういうもんだよ。目が覚めたら消えちゃうんだよ」

「けど、まだドキドキしてる」

ほんとうだ、とタピオは思いました。毛布ごしにコッパの荒い息づかいとドキドキが伝わってくるのです。そしてふと思えます。彼はいったいどんな夢をみたんだらうと。

(いや、そもそも、ケツアルコアトルスが夢をみるのだろうか――)

「目の前でね、光が弾けたんだ。いっしゅんで何も見えなくなった。ものすごく明るくて、ものすごく暑くて、身動きができない。ぼくは誰かを助けに行かなくちゃならないのに、ぼくの助けを待っている人がいるのに、ぼくは目が見えず、体が動かないんだ」

——」

絞り出すようなコッパの声音はタピオを身震いさせました。「なんてつらい夢だ——」けれどもタピオは、それがかつてレル先生の身に実際に起こったことだとは知りません。「つらい夢だけどね、コッパ、それは夢にすぎないんだよ、さあ、何も考えないで、もう少し眠って——」

コッパを慰めようと、タピオは毛布の上から撫でようとしたのですが、その手をはねのけるようにコッパはがばっと身を起こしました。

「行かなくちゃ！」

「ど、どこへ行こうっていうんだ、コッパ!？」

「決まってるじゃないか! 先生のところだよ! 先生もペイリーさんも、ケガをしてるんだ!」

「そ、それはそうだけども、いいか、よく聞いてくれよ。外はまだ夜だ、まだ暗いんだ。ケガ人がいるとわかっていても、助けに行くことはできない。助けに行った方が遭難してしまうかもしれないからだよ。だからね、今は朝がくるのを待つしかないんだ」

「でも! 先生たちが……!」

小声だったタピオの声はいつしかどんどん高くなっていきます。

「わたしだって今すぐおじさんを探しに行きたいんだ! さいしょに行方不明になったアルヒッパ・ノーマンはわたしのおじさんなんだよ! 雨の山の中で行方不明だなんて、しかも彼は老人だ、力尽きて倒れてしまったんじゃないか、あれやこれや、よくないことばかりが頭をよぎっていく、わたしだって心配で心配で、いてもたってもいられない! だからきみの気持ちはよくわかるよ! 今すぐ探しに行きたい! だって、おじさんの身内はこのわたしタピオだけなんだ、おじさんはお金持ちかもしれないけど、家族がいない。そりゃあ寂しい人でね、わたしのような遠い親戚しか頼る者がいない。それと楽しみといたら岩山登りしかない。あとはお金の勘定だけだ。そんな寂しい人なんだ、わたしが探しに行かなければ心配する者はおじさんの秘書だけさ。それも明日の支払いをどうするかっていう心配でしかない。お腹をすかしているんじゃないだろうか、持病の気管支炎をこじらせて咳が止まらないんじゃないだろうか、寒くないだろうか、暑くないだろうか、膝は痛くないだろうか、心配事があとからあとから湧いてでて

くる。それでもコッパ、待つしかないんだよ！！」

55.

コッパは何も言えず、ただぶるぶると体を震わせています。

「……寒いんだね？ そうだろ？ さ……」タピオは毛布でコッパを包み、自分のふとこころにいれました。とにかく温めてやらなくちゃ、と思ったのです。

「寒くて当然だよ。きみの仲間が大勢いたころは、今よりずっとずっと暖かい、一年じゅう夏まっさかりみたいな、そんな時代だったんだから。食べるものも、そりゃあたくさんあって困ることはなかったはずなんだ……」

一度は、自分のアパートに戻ってパンがゆかなにか、体の温まるものを作ってやろうかと思ったのです。でも夜が明けたらすぐにでも救助に出発しようと、イソマキ巡査は準備やら手配やらで警察署の中を駆け回っています。タピオが救援ヘリコプターと一緒に乗せてくれるよう頼むと、「もちろん！」と巡査は請け合って、「もうすぐ夜明けです。準備が整いしだい、飛び立ちますから、そこにいて下さい！」慌ただしくどこかへ行ってしまいました。置いてけぼりにされたらたまらないので、タピオは警察署の小部屋のすみっこでコッパを抱きかかえていたのです。

しばらくして、「もしもし！ タピオさん！」呼ばれて、はっとしました。どうもうとうととしていたようです。顔をあげてみれば小部屋の入り口でイソマキ巡査がいらいらと、手招きしています。そして言いました。「ヘリコプターが出発します。さあ早く！！」

警察署の裏のヘリポートへ早足で歩きながらイソマキ巡査は「ああ、これを」と小さな紙袋をタピオに差し出しました。タピオがげげんな顔で見返すと、「朝ごはんです。

へりの中で食べてください」

「え、わたしに？」

「ええ、タベ、バタバタしていたのを近所のレストランのご主人が見ていてね、『事件か事故ですか』と様子をうかがいに来たんです。まあ、近所なんで、署の人たちは誰かどうかふだん食事に行行って、誰かどうかご主人と顔見知りなんです。それで、顔見知りのひとりが、『じつは遭難事故が……』、と。

『遭難？ あの、それまさか、診療所のレル先生じゃありませんか！？』

『はあ、その、なぜ？』

『診療所のコッパがいなくなっちゃったからレル先生はぜったいさがしまわっていると、うちの娘が云うんです。それもたぶん、山の方を。娘はすっかり興奮して寝かしつけるのに苦労しまして』

『それでこんな時間に親娘でお散歩を？』

『そういうことです。けっきょく、疲れて眠ってしまいましたかね』そう言ってご主人はおんぶした女の子を揺すり上げてみせました。

『ご心配なく。夜明けとともに救助隊が出発しますから』

『ということは、先生の居場所はわかっているということですか！？』

『あーいやそのですね、遭難者がだれかということにつきましては個人情報保護の観点からしてですね』

『何言ってるんですか、レル先生も心配ですが、娘の心配はコッパなんですよ！！コッパがいなくなったのは自分のせいだと言って聞かんのです！！ だからこんな時間に親娘でお散歩を！！』

『お、落ち着いてください、コッパって、アレのことですね？ 四つ足の。アレだったら今、署で眠りこけてます』

『……ほんとうですか……』

というわけで、この朝ごはんはレストラン『ホペア・クー』のご主人から救助隊全員への差し入れなんです。その紙袋の中はあなたの分と、ほら、コッパの分も入ってるそうですよ」

「え、コッパの分まで？」

「ええ、なんでも以前、レル先生から相談されたんだそうです。中身はなんだか私は知りませんが、『ホペア・クー』のご主人は、コッパは喜ぶはずだと言っていました」

それは川魚のミンチをソーセージにしたものでした。ご主人が言ったとおり、コッパは大喜びでたいらげたのでした。

56.

ヘリコプターにはハユハ記者もちゃっかり乗り込んでいました。

「ちゃっかりとはなんだ、ちゃっかりとは。読者には知る権利があるのだよ。私ハユハは読者の権利のために仕事をしてるんだ。さ、あんたこそどいたどいた！」

はいはい、それはどうも。って、ハユハさん、あなたの後ろにいらっしゃるのは——写真屋さんでは——

「カメラマンと呼びたまえ、カメラマンと！ さ、報道カメラマンくん、読者の権利のためにじゃんじゃん写真をとりまくるのだ！」

言われるまでもなく、カメラはふしぎな物体、つまりコッパを狙っているのです。そしてハユハ記者はタピオに質問攻め。

「ほお、それがコッパのエネルギーの元ですか？」

タピオはレル先生、ペイリー氏、ノーマンおじさん、三人のことが心配で、食事中的コッパのことまで頭が回りません。もう、どうとでもなれ、という気分でした。それで、「ええまあ、エネルギー・カートリッジというやつですよ」と、適当なことを言っています。

「ふむふむ、ソーセージ形のエネルギー・カートリッジとは。凝ってますなあ！ どんな味なのかな、コッパくん、教えてくれるかな？」

コッパはひとつごっくんと飲み込んでから、「さかな味さ。おいしいよ」と、気前よくこたえています。そのうえ、「きみきみ！ こっち向いて！」とカメラマンに言われ、「僕、正面からだの間が抜けて見えるんだ、横顔のほうが魅力的なんだよね」なんて言いながらポーズをとっています。タピオはほんとにもう、どうとでもなれ、と思いました。

そして、ヘリコプターの機長が冷静な声で告げます。「そろそろ現場に到着します」

57.

「おい！ レル、聞こえるか！？」

ペイリーの声は震えていました。ふしぎな生き物コッパが割れたフロントガラスをくぐり抜けて出て行って、もう何時間も経っていました。「助けを呼んでくる」と、コッパは言っていたものの、その言葉をペイリーは半分は信じていませんでした。人の言葉を話すケツァルコアトルスの子どもが真っ暗な夜中に、事故の現場から町へ飛び、助けと誰かに頼み、頼まれた誰かが山の中へ助けにやってくるなどと……

（俺は古生物学者で、世の中のごく普通の人たちがどんなことを考えてくらしているかなんて、あんまり興味がない。でも、たぶん、あのおかしな物体の言う事に真剣に耳を傾ける人間がいようとは、正直なところ、まあ、いない、だろう）、と。

そして、かえってむらむらと不安になってきました。

(とっつかまってるかもしれん——だって——おもちゃみたいにちっこいが——知ってるやつは知ってるし知らんやつは知らんだろうが——あれは翼竜——ケツァルコアトルスなんだぞ——)

(もしも、とっつかまえたやつが、コレは超のつく希少な、いや、ありえない生き物だと考えれば世界中が大騒ぎになるだろう。おもしろい物体だと考えればアレの前に大金がつかまれるだろう)

どのみち、ペイリーには面白くもなんともないことになるでしょう。

(いっそのこと、途中で気が変わって、どっかへ飛んで行っちゃってくれ……)、とまで考えるペイリーです。(けど、そうすると、俺たちはどうなるんだ?)

ふだんのペイリーだったら、髪の毛をかきむしりながら、そのへんをいらいらと歩きまわっていたでしょうが、足を挟まれて身動きできない今、髪の毛をかきむしるしかありません。(いまに禿げるな)と思いながら。そして、眠っているレル先生を横目で見、うらやましく思いました。

しばらく前にレル先生は目を覚ましました。落ち着いた声で、「さっき、コップがいたような気がする」、というので、ペイリーは、「ああ。いたよ」、と答えました。それから、「気分はどうだ?」、と尋ねました。

「良くも悪くもないな。車は崖から落ちたんだろう?」言いながら腕時計を見ます。腕時計の文字盤は暗いところでも見えるように淡くひかっています。「落ちてから三時間くらい経っているのか」

ペイリーはほっとしました。「コップが来た時は、おまえ、もうろうとしてたぞ。頭は無事だったみたいだな」

脳しんとうを起こしていたんだろうとつぶやくレル先生に、ペイリーは、コップが助けを求めに行ったことを話しました。それから三時間くらい経っていることも。

「救援が来るとすれば明るくなってからだ。朝まで待とう」

「それだけ!？」

「なにが?」

「いや、その」

「ほかにできることはないし、コッパだったら心配いらないよ。彼は信用できる」そう言って、レル先生は眠ってしまいました。ペイリーとしては、ちょっとは親友の俺のことを心配してくれよ、と言いたかったのです。

絶体絶命

58.

「聞こえる」

レル先生の声は落ち着いています。「ヘリコプターだ」

回転翼が回るバタバタという音も聞こえますし、辺りはまだ薄暗いものの、物の形ははっきりとわかります。

「ヘリだ！」ペイリーも怒鳴るように言いました。「来た！ だから言っただろ！ 救援は必ず来る！ コッパが連れてくるって！！」

「そう言ったのはボクだけだね」

明るくなってみると、ふたりが乗った車は三十メートルくらいある崖の真ん中あたりで、せり出した岩場に不安定な姿勢で乗っかっているのがわかりました。救援隊がどうやってふたりを助けようかと頭を悩ませている間、コッパがふたりのところへやってきました。ふたりはもちろん、大歓迎。

ペイリーさんは、「やあ、ずいぶんと早かったじゃないか、まだ夜明け前だぞ」なんて、余裕の出迎えです。一晩中、心配したり疑ったり、ああでもないこうでもないと考えをひねくり回していたことなど、おくびにも出しません。じっさい、昨夜は一睡もしていないのです。

「コッパ、食事はちゃんとしているかい？」レル先生は落ち着いて尋ねました。先生が知っているかぎり、コッパの食事は昨日の朝ごはんまでだったのですから。コッパは「だいじょうぶ」、と答えます。「エネルギー・カートリッジで充電したから」
「え」レル先生は思わず聞き返します。コッパは「それ」をタピオからもらったこと、タピオはレストラン「ホペア・クー」のご主人からもらったのだと、説明しました。ペイリーは目を白黒させます。「ホペア・クー」といえば、昨日カーラを家まで送って行って目にしたレストランの看板です。真っ黒の地に無数の銀の小さな星と銀の三日月が描かれていましたっけ。そこでおいしいお茶まで飲んだのです。

「な、なんだかよくわからんが、腹ペコでなければオッケーだ！　しかしこっちは腹ペコだ！」

「落ち着いて。ペイリーさん。朝ごはんは二人分、ちゃんと用意してあるよ。もうしばらく、我慢して」

ペイリーをなだめすかしたコッパはひらりと飛び立っていきました。行方不明の人がもう一人、いるのです。

59.

レル先生の元気な様子を見てコッパはほっと胸をなでおろす思いでした。そして、崖の上の道路をレッカー車がやってくるのを眼下に見て、くるりと体をひるがえします。

さて、ノーマンさんはいったいどこにいらっしゃるのでしょうか。聞けば、ノーマンさんはコッパを探して岩山に入ったというのです。まあ、彼の遭難はコッパを心配してというより、欲にかられて、ありていにいって身から出たサビなのですが。それでもコッパは、たったひとりの身内タピオの嘆きを目の当たりにして、なにがなんでも見つけ出すのだという決意に燃えていました。

ノーマンさんの車は、レル先生たちが事故に遭ったところよりも、もっと山の奥の方にありました。昨日の夕方から置きっぱなしになっているその車を中心に、コッパはゆっくりと円を描くように飛びます。緑色の植物は見えますが背の低いものばかり。あとは岩。こんな場所で昨夜の激しい雨をしのぐことができたのでしょうか。雨はとうに止み、朝の最初の光が空の向こうを染めようとしている時です。

ごつごつと空に向かって突き出した岩、また岩ばかりの景色。時々岩場と岩場をつなぐように浅くなだらかな谷がみえますが、動くものはなにも見当たりません。

昨日、岩山の向こうへいってみようかと思ったコッパです。でも岩山は奥へ行くにつれてどんどんどんどん険しくなり、見知らぬ場所はやっぱり怖くて、（雨が止んで、明るくなったら……あした……）思いきって山を超える心づもりでした。

（レル先生がどんなに優しくても、いつまでもいっしょに暮らすことはできないんだ……）

暗い雨の中、岩陰でひとりで泣いている時に車のヘッドライトが崖を転がるのを見たのでした。まさか、先生その人の車だったとは。

コッパは呼んでみようと思いました。そこで、息をいっぱい吸い込み、「ノーマンさあん、ノーマンさああん——ノーマンさああん——」高い声が山々の間をこだま

しています。

と、その時——視界の端っこでなにかが動いたような気がしました。「——ノーマンさん!？」あわただしくあたりを見回すと——今までどこに隠れていたものか——灰色とこげ茶色とを混ぜたような色の、丸々とした大きなかたまりが、その鈍重そうな見かけによらず思いもよらない早さで、狭い谷間を動いています！ クマです——！

「もしも、キミがエサを獲りに行って……」

レル先生は、パソコンの画面に映し出されるその動物の姿を指さしながら膝の上のコッパに言ったものでした。「クマに出会ってしまったら、近寄ってはいけないよ。けっして、近寄ってはいけない。とにかく、できるだけ遠くへ逃げるんだ。さもないと、キミがクマのエサになってしまう」

そうだ、クマだ！ コッパは凍りつく思いで走るクマを見下ろしました。小さな目に敵意を燃やし、猛烈なエネルギーをまき散らしながら突進する姿を見れば、（もしかしたら仲良くなれるかもしれないのに？）という淡い希望は木端微塵に砕け散ります。それにしても、このクマはなぜこんなに怒り狂って走っているのでしょうか。コッパはふとクマの前方に目をやって、そのわけを知りました。

人がいたのです！

60.

こけつまろびつ、足をすべらせながら走っている人間の体つきは大柄だけれどもけっ

して若くない、初老の、男の人。帽子からはみ出した短い髪は白く、その様子にコッパは見覚えがありました。いつだったかレル先生を訪ねてきた、声の大きな元気な老人。ノーマンさんです。

やっと見つけました！ でも大柄なノーマンさんが小柄に見えるほど大きな大きなクマが、ノーマンさんを追いかけています！

「けっして近寄ってはいけない」と、レル先生が頭の中で繰り返し、言っています。コッパは頭をひと振りして先生を追い出しました。ノーマンさんが山に入ったそもその原因は、自分にあるとわかっていましたから。それに、もしかしたら、さっきノーマンさんと呼んだ声がクマを刺激してしまったのかもしれないかもしれませんでした。

61.

空中を矢のようにすべり、コッパは走るクマの前に出ます。けれども獲物を追跡するのに夢中のクマは、急に現れた小さなモノには目もくれません。じゃまだ、とばかり、鋭いかぎ爪のついた腕をぶん！ と振り、コッパを払いのけようとしてきました。突進しながら太い腕を無造作に振ったせいで、空気がふくぎつに動き、ちょっとした乱気流が起きて、羽のように軽いコッパは乱気流に巻き込まれて空中でよろめきました。相手の突進を止めるどころか、自分の態勢を保つことさえできないと知って、コッパはがくぜん。これでは太刀打ちどころか、お話になりません。

堅い岩場に這いつくばるように降り立ち、コッパはあえぎました。そして、クマの後ろ姿に向かって叫びました。「やめて！！ おねがだから、やめて！！」

診療所の天窓の網入り強化ガラスにひびを入れ、警察署の窓ガラスを割ることができ「声攻撃」も、我を忘れた野生の動物にはまるで効果がありません。ずっと先の方で老人の喚き声がします。そしてその喚き声はすぐに消えて、静かになりました。

コッパは両手で耳を塞ぎ、目をつむり、縮こまりました。もう、だめだ、と。

62.

崖の途中で引っかかっていた車ごと助け出されたレル先生は、近くの平地に着陸したヘリコプターの捜索隊に加わりました。もう一人の行方不明者、ノーマン氏を探すためです。ペイリーさんも一緒に行きたがりでしたが、足をケガしているので絶対にだめだと、レル先生が許可しなかったのです。ペイリーさんは、「名外科医のいうことには従います」、としぶしぶ受け入れました。

そして、同行した新聞社のカメラマンが空の高いところ旋回して急降下にかかるコッパの姿をみつけて叫びました。「あの岩の向こうだ！ コッパがなにか見つけたようだぞ！！」

険しい岩山を乗り越えた捜索隊は、そこで驚くべき光景をみることになりました。

63.

岩山の向こうは狭いながらもなだらかな谷。谷の向こうにも同じように険しい岩山が立ち並び、谷は岩山の間を縫うように山の奥へ、上の方へと続いています。その上りの坂道の先頭をノーマン氏が、その後を巨大なヒグマが走っているのです。ヒグマのごつい肩が動き、急降下してきたコッパを払いのけて叩き落とし——ノーマン氏の悲鳴が——

捜索隊はひとり残らず耳をふさぎ、目をつむり、縮こまり、顔を背けました。捜索のさいごにこんな場面になろうとは。

やがて――

「あ」と声をあげたのは誰だったのか。

レル先生は決然と目を開き、顔をあげました。若いころ、外国の紛争地帯で医者として働いていた先生は、（どんなむごい場面もボクは受け入れてきた。今だって、かわらない）、と思いました。それがたとえ――

「コッパ？」

「いや」と、さっき、真っ先に「あ」と言った声がカメラを構えつつ、応えます。「あれは……ちがう。コッパはこっちの小さいほうだろ」

空中に、グライダーのようなモノがいます。

その翼の端から端まで、およそ、十メートル。細く長い頭部の長さはおよそ三メートル。ほとんどは前方に長く突き出したくちばしです。山上で空をほとんど隠してしまっているそのモノは空中に留まって、ヒグマにくちばしの先を向けていました。ヒグマはたたらを踏んで立ち止まったものの、頭に血が上っていたのでしょう、いきなり目の前にあらわれたくちばしになぐりかかりました。猛烈なパンチをくちばしはちょっと横に動かして受け止め、軽く振り払いました。さっきコッパがされたように。振り払われたヒグマの巨体は吹っ飛んでいって、岩場で伸びてしまいました。

64.

ノーマン氏は衰弱していただけで、ケガはありませんでした。けれど、ノーマン氏も

イソマキ巡査はじめ救助隊の面々も、タピオも、空中に浮かぶ巨大なモノにすっかり目を奪われ、なにをやるにも上の空。救助隊がノーマン氏を保護し終わると、巨大なモノはゆっくりと地面に降り立ち、コッパとくちばしを突き合わすようにして、なにか話をしているように、レル先生には見えませんでした。

「先生！！」

「コッパ！ ケガはない？」

「うん。どこもなんとも。それより、ノーマンさんは？」

尋ねられてレル先生は見回しましたが、「巨大なモノ」に視界を遮られて当たりの様子はぜんぜんわかりません。それで「心配いらない。救急隊員がみてくれてる」と答えました。

「……よかった！」コッパは心からそう言い、先生の手を抱かれました。コッパの全身を両手で撫でながら、先生は言いました。「お父さんか、お母さんが、迎えに来たんだね？」

気持ちよさそうに撫でられていたコッパは、はた、といった様子で、きょとんと先生を見ました。「『彼』のこと？ 『彼』はともだちだよ」

「え……お父さんでもおかあさんでもない？ ともだち？」

コッパはなんの迷いもなく、そうだよ、とうなずきました。先生はあせんと、「巨大なモノ」を見上げます。あらためてよく見ると、それは全身、真っ白な羽毛でおおわれているのがわかりました。コッパはまだ、本当にこどもで、いずれ成長すればこういう姿になるのかもしれませんが。

(いずれ成長すれば……) 先生はぼんやりと考えます。こういう姿になって、ヒグマでさえ口先であしらえるようになるのか、と。

「先生」呼ばれて、レル先生は我にかえりました。コッパの声には改まったひびきがありました。

「先生、僕、行くよ」

「……そう、か」

コッパはちょっとうつむきます。「『彼』はずっと僕を探してたんだって。すごく心

配してたって。だから……」

「コッパ。人はひとりでは生きていけない。キミだって同じだ。仲間のところへ、帰りなさい」

目を潤ませたコッパは震える声で言いました。「先生、ありがとう。ありがとう。ペイリーさんに、タピオさんに、エマさんに、カーラに、僕が、ありがとう、って——」

「かならず、伝える。私は、ペイリーも、タピオも、エマさんも、カーラも、キミのことを忘れない」

コッパは言葉もなく、レル先生の手の中で震えました。先生は指先でコッパの友だちの白く固いくちばしにそっと触れ、つぶやきます。「コッパをよろしく」、と。くちばしがうなずいたようだったのは、レル先生の気のせいかもしれません。

二羽の、というべきか、二体というべきか、大小のケツアルコアトルスはふわりと宙に浮き、救助隊の上をしばらく旋回し、岩山の向こうへと飛び去りました。

それから

65.

「きみきみ！ ちょっと！」

新聞社のカメラマンは腕をつかまれてへりの着地脚のカゲに引っ張り込まれました。

「きみ、カメラマンだろ？ さっきのをちゃんと撮ってるだろうね！？」

「そ、そりゃまあ、撮るには撮ったけど。なにしろ、バカでかい上にあんまり近くだったから、アップ写真ばかりで」

「アップばかりだって！？ 私は全体像が欲しいんだよ！！」

「んなこと言ったってね」

「全体像だよ全体像！！ アレの風船を作るんだ！ 子どもたちは大喜び！！ 私は大儲け、まちがいなし！！」

「えー、ちょっと失礼」

ノーマンさんとカメラマンがコソコソと話し合っているところへ、もうひとり、割り込んできました。

「誰ですあなたは」

「あーお気遣いなく。んなことより、あなた、風船なんてケチなこと言いなさんな。もっとすごいモノを作れますよ」

「……どういうことですか」

「ロボットですよ」

「ロボット……」

「そう、ロボットです。そういうことが大好きで、詳しくて、腕のいい本職のシステムエンジニアを知ってます。ふもとの町に住んでいますよ、キュトラ氏という人でね……」

「本当かね！ 資金なら私がどうとでも……」

三人のおじさんたちの話し合いはコソコソといつまでも続くのでした。

66.

あれから、十数年の年月が流れました。

レル先生とタピオはあいかわらず診療所で忙しく働いています。仕事が終わるとレル

先生は裏庭にテーブルを持っていき、遠くの岩山を眺め、エマさんとおしゃべりをします。キッチンからいい匂いがして、タピオがいそいそと料理を運んできます。晩ごはんのあとはランプの灯かりでチェスをしたり、おしゃべりを楽しむのです。

一方、こちらは……

真っ青な空の下を、豪快に砂を蹴立ててジープが走っていきます。

「あぁっついですねー」

「砂漠だからなー」

「ほこりっぽいですねー」

「砂漠だからなー」

「この車、乗り心地さいあくー」

「わかったなー俺は貧乏人さー」

「ノーマン財団の援助を断るからでしょー」

「……………」

「ねえ先生ー、ほんとーに、このルートでいいのー？」

「何度も同じこと言わせるなー、今日はこのルートだー、俺の勘を信じろー」

「……………」

楽しい会話を交わしながら走って行くのは作業服に金髪をポニーテールにしてサングラスをかけ、ハンドルを握る学生と教授です。ここはゴビ砂漠の真ん中。恐竜の骨を発掘に行くところなのです。

「ペイリー先生、あたし、なんだか頭がおかしくなったみたい」

「あついからなー」

「この車……跡をつけられてるんじゃないかしら……」

「カーラ・アハマニエミくんよ、砂漠のど真ん中を誰が跡をつけてくるというんだ？
ついに頭がおかしくなったか」

「だからそういつてるでしょ！！ 先生、アレは何！？ アレは——まさか——」

ジープのバックミラーの中を、みるみる何かが近づいてきます。それは——とても大きく、とても速く、カーラは自分の目が信じられず、自分の目で見ずにいられなくなって、ついにバックミラーから目を離し、ハンドルをつかんだまま後ろを振り向きました。

「おーい、前を見て運転しろ。事故ったら修理代はおまえが——」

カーラにつられてふと後ろを振り向いたペイリーは口をあけたまま黙ってしまいました。

みるみる、みるみる何かが近づいてきます。地面をではなく、ひどく低いところを、飛んで。カーラとペイリーは悲鳴をあげました。恐怖と感嘆とが入り混じった悲鳴を。

ジープの真後ろから近づいてきたそれは、すいっと横にそれ、ジープに並びます。すどく——前へ突き出した長いくちばし、涙型の赤い目、コウモリのような翼。純白の羽毛。まるで、白いライダー。

ふたりは同時に叫んでいました。

「コッパ！？」

それはしばらくジープと並んで飛び、ふたりをちらりと見やり、軽く頭を下げたようでした。それからひと声、高い声を発して、砂漠の熱い空気に乗れ、優雅に砂丘を越えて、青い空の向こうへと消えていきました。

『コッパとレル先生』

あとがき

minemuraのパソコンの創作系フォルダーの中に、翼竜というファイルがあります。一口に翼竜といっても、その種類は数百種以上、翼を背負ったトカゲみたいなことから、これはいったいなんなんだ！？ というのから、まあ、ネットで探してみると時間を忘れてしまう種類の多さ。その中でもっとも興味をひかれたのがこれ、ケツアルコアトルスです。なんといっても美しい！ 化石を組み立て直したうえでの想像図だし、体色まではわからないはずだけど、白く表現されてることが多いんですね。姿に一目ぼれして資料集めて『翼竜ファイル』を作ったのが2010年頃のことです。

かれこれ何年も経って創作意欲も薄れ、忘れかけていたところ、ある日、ぱっと目に入ったのがナショナルジオグラフィック誌2017年11月号の表紙。なんと！ これは！ ケッチャんじゃないか！！ なつかしーひさしぶりー元気だったー？ てなわけです。速攻で注文、そこで翼竜との再会に加えて創作意欲の再燃に至ってしまったのですが、それからまた何年も経ってしまっています。

翼竜ファイルに残っていた昔描いた落書きなんかながめながら、ほのぼのした話にしようか笑える話にしようかそれとも…方向を決めかねつつ、いちばん悩んだのは主人公の名前。『ケツ』は本人が却下、『Qちゃん』はなんかちがう、もっとスマートなのがいいなーと、筆者は思っていました。そしてどこから湧いて出たのか、コッパという名。この名前が決まったところで主人公のキャラクターもお話の方向も決まったのです。そして最終話の、成長したコッパが、走る車と並んで飛ぶという場面も。筆者が一番好きな場面でもあります。

迎えに来た『彼』とコッパの関係は……考えていません。親が迷子になった我が子を探すのは、まあ当たり前のこと。心配したともだちが迎えに来たというところにですね、『彼ら』の間にはそういう社会的なつながりが当たり前にあるのかもしれないし、ある

いは……『彼ら』は親から生まれるのではないのかもしれませんが。

作中の地名、店名、人名などはほぼフィンランドの言葉からつけてあります。例外はペイリーさん（この人はアメリカンという設定）のみ。

いつか、ケツアルコアトルスを主人公にしたお話を書きたいと思っていました。ちょっと月日はかかりましたが、夢がかないました。

お付き合いいただき、ありがとうございました。

※・ご感想、お気づきの点など、遠慮なくお寄せください。

2021年1月14日 峯村 明

コッパとレル先生

2021年1月14日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「素材good」 <https://sozai-good.com/>

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
